門真一馬の愛すべき日常

丸いの

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
門真一馬の愛すべき日常

【Ｎコード】
Ｎ２２２６Ｙ

【作者名】
丸いの

【あらすじ】
門真一馬は、放送部に所属する普通の高校生。
今日も彼は、どうみても年下にしか見えない姉と共に、楽しい日々を過ごす。

第０１話：５月上旬、火曜日（前書き）

＊２０１１年１２月２６日に少し推敲、加筆修正をしました。

第０１話：５月上旬、火曜日

僕こと門真一馬（カドマ カズマ）の朝は、騒々しい足音から始まる。
僕の部屋があるのは、門真家二階の最も奥。
朝になると、生まれたときから知っている少女が、ドタドタと騒がしい足音を立ててそこへとやってくる。
ちなみにその音だけで、僕は既に既に覚醒させられている。
無論それで終わるわけではない。
足音はそのまま僕の部屋まで辿り着くとすぐに、追い討ちをかけるようにノックも無くドアを開け放って、中へと流れ込んでくるのだ。
そしてその後は自称１３０ｃｍ（４月の身体測定によると正確には１２８ｃｍ）の小さな身体で僕の上半身に飛び乗り、少し焼けた両腕で僕の肩をつかんで全力で上下に揺らし、僕を起こすために騒ぐ。
「ほーら、カズマ！　もう朝だよ！　おーきーてー！」
聞こえてくるのは、聞きなれた少し舌足らずな、鈴を鳴らしたような可愛らしい声だ。
……いや、音量的には鈴、という形容は正しくない。
どっちかといえば……ベルを振り回したような綺麗な騒音、の方が的確だろう。
うん、こっちの方がしっくりくる。ベルを振り回したような綺麗な騒音。
「うあ……」
そんなことを考えながら、僕は少女のいつも通りの起こし方に、いつも通りのうめき声で答えた。
そのまま目を開けると、見慣れた姿が僕の瞳に映る。
身長は前述の通り約１３０ｃｍ、肌は少し焼けた薄い小麦色で、元気で健康的、というのが一目でわかる。

顔も整っており、美少女、と呼んで差し支えないレベルだと思う。実際、別の事情もあるが学校でもかなり人気らしいし。
またそんな顔のパーツの中でも、特に印象深いのが勝気な感じを漂わせている釣り目だ。
その瞳は濁りの無い輝きが宿っていて、純粋そうな雰囲気を漂わせている。
髪は下ろすと肩くらいまでの長さがあり、普段は左右一対のリボンで縛られた――いわゆるツインテールにしていた。
リボンは日によって変えているようで、今日は無地の赤いものを付けていた。
少し記号的な表現をするなら、元気で可愛らしい小学せ……もとい。元気で可愛らしい少女、という感じだ。
「おはよう、カズマ！」
僕の目が開いたのを確認してから、その少女はいつも通りに元気良く、僕に朝の挨拶をする。
「うん、おはよう……」
僕も毎朝、僕を起こしてくれる少女……
「姉さん」
現在１８歳で高校三年生である僕の姉、門真円（マドカ）に朝の挨拶をした。

挨拶が済んだら姉さんを部屋から追い出して、制服に着替える。
私立阿鳥（あとり）学園高等学校。
それが僕と姉さんが通う高校の正式名称だ。
ちなみに男子の制服は普通のブレザー。
洗面所に行って鏡を見ると、ちょっと童顔気味（高校三年生でありながらよく小学生と間違えられる姉さんほどではないが）な顔が映った。
髪型も昔馴染みの床屋のおっちゃん任せで坊ちゃん刈りになっているせいか、なおさら子どもっぽく見える。

身長は１７０ｃｍあるから実年齢である１５歳、学年で言うと高校一年生未満に見られたことはないのだが、もう少し洒落っ気は出すべきかもしれない。
しかし面倒くさい、と思っているのが現状である。
顔を洗ったり歯を磨いたりしながら、僕はそんなことを考えていた。
それから姉さんと一緒に朝食を済ませて、二人で歩いて学校に向かう。
僕らが通う私立（あとり）阿鳥学園高等学校、通称阿鳥学園について。
主な略称はアト学で、特色や特徴などは受験の時に貰ったパンフレットに書いてあった気もするが、特に覚えていない。
要するに、僕にとっては家から近いことだけが利点な普通の高校である。具体的には普通に歩いて１５分。
「カズマ、そろそろ高校生活には慣れた？」
「うーん……まあ慣れたっちゃ慣れたかなあ」
いつもどおり、姉さんは他愛もない話題を振ってくる。
僕もいつもどおり、姉さんの会話に応じた。
「今日で入学してからちょうど一ヶ月だよね。クラスメイトの友達とか出来た？」
「出来てるよ。ってか、色々話してるだろ」
「まあそうなんだけどさ。なにか新しい話ないの？」
そう言われて少し考える。
というかぶっちゃけ無い。
そもそも、高校に入ってからはほとんど毎日姉さんと登下校しているのだ。
昨日あったことなら、昨日の下校時に話題にしている。
となると、真新しい話になりうるのは、以前に話し損ねたことくらいしかないのだ。
「んー……田中が授業中にケータイ鳴らした、って話はしたっけ？」
というわけで、ちょっと前のことで、話したかどうかがうろ覚え

な話題を出すことにした。
ちなみに校則では、ケータイは校内での使用は禁止である。
といっても割と甘い教師が多いのか、休み時間ならだいたい見逃してくれる。
しかしさすがに授業中に鳴らしたりすると没収され、放課後まで返してもらえない。
もっとも、僕自身は没収されたことがないので聞いた話なのだが。
「えっと、確か着信音が黒電話だったせいか、ケータイの音だと思われずスルーされた、って話だっけ？」
「そうそう、言ってたか」
「昨日聞いたよー。あ、それで思い出した。昨日さ、カナちゃんが」
「カナちゃん？」
「うん、私のクラスメイトなんだけどね。その子もケータイ、うっかり授業中に鳴らしちゃってさ」
「ばれなかったの？」
思い出したと聞いてオチを予想した僕は、気付くとそう訊いていた。
「ん～……」
姉さんは少し考え込んでから、改めて口を開く。
「えっと、先生にはバレなかったんだけど……」
「よかったじゃ……けど？」
途中までで感想を言おうとしたが、語尾が気になってオウム返しにする。
「えっとね、その着信音が着ボイスでさ」
「着ボイス……ああ、台詞を着信音にしてるやつだっけ。ユーガッタメール！　みたいな」
ちなみに僕の携帯の着信音はデフォルトの電子音だ。
「そうそう、そういうの。でもさ……それがなんていうの、どう聞いてもアニメのやつでさ」
「どう聞いても……って、どんなだったの？」

「なんか必殺技っぽかった。可愛らしい女の子の声で、スターライト・ブラスター！！　とか聴こえてきた」
「……授業中にそんなん聞こえて、よくバレなかったね」
どう考えても授業中に発せられる台詞ではない。
「ああ……その子、その時は机に突っ伏してたからさ。『ね、寝言です！』って言いわけでごまかしてた」
「どんな寝言だよ……」
思わず隣の席からそんな寝言が聞こえてくる事態を想像する。
うん、僕なら迷わず突っ込む。
「それで『そうか、目は覚めたか？』とだけ言ってスルーする先生も相当なツワモノだとは思ったんだけどね……って、まあそうじゃなくて。それでその子、ケータイは没収されなかったんだけどオタクだってのがバレちゃってさ。クラスの……男子のオタクグループを毛嫌いしてた女の子達がどう接するか迷ってた。なんかぎこちなかったよ」
「へえ……姉さんも？」
姉さんがそんなことで人を嫌いになるとは思わないけど。
「まさか。ってか私も人のこと言えないし」
「だよねえ」
僕はあっさりと納得の意を示す。
そもそも姉さん自身、若干アニメオタクの気があるのだから。
なにしろ夕方の子供向けのものだけでなく、マニアックな深夜放送のヤツまで観ているくらいなのだから。
別に観るのはかまわないんだけど、うっかりホラー系を観てしまって、怖くなったからといって深夜三時頃に僕を叩き起こしてトイレについていかせるのはやめて欲しい。
「でも私は、それを言ってもオタク扱いされないんだよね」
不思議そうに姉さんは呟く。
「そりゃもちろん」
僕は一つの真理を語ってやることにした。

「高校生にもなってアニメが好きだ、って公言するのは少々違和感があるけど、姉さんなら見た目から言って違和感無い。むしろ相応し――いたっ！？」
言い終える直前くらいで、こめかみに激痛が走った。
どうやら姉さん必殺の、上段飛び回し蹴りを食らったようだ。
短いスカートで飛び回し蹴りなんて放ったわけだから当然、可愛らしいクマさんが丸見えになったが姉さんは気にする様子もない。
もっとも僕自身、いまさら姉の下着など見たって嬉しくもなんとも無いのだが。
むしろ身内として恥ずかしいからもう少し慎みというものを身につけて欲しいと思う。
というか、こめかみを爪先で貫かれたのが効いていて、その場にへたり込んでいた。
「誰が小学生ですって！？」
だが僕のそんな様子を気にも留めず、姉さんは怒りをあらわにして僕を怒鳴りつけていた。
「それは言ってない……けど下着だって可愛らしいクマさんだったじゃないかっ、それで自分が子どもっぽくないなんてよく言えるね！」
僕も感情に任せて怒鳴り返す。
こめかみへの一撃が効いていて、若干キレていた。
「なによ、やるの！？」
姉さんはそう言いながらファイティングポーズを取る。
その構えは両腕を垂直にあげて顔を守るような体勢で、しいて言うならキックボクシングのそれに近い。
しかし手首が前に曲がっているせいか、どちらかといえばなんか招き猫っぽくなってしまっていた。
「望むところだ！」
僕も構える。
こっちは特にひねりのない、あえて言うなら普通のボクシングの

ファイティングポーズだ。
姉さんは小さい身体とすばしっこさを活かして、確実に急所を貫く一撃必殺型の戦い方を得意としている。
だから懐に潜り込まれないようにある程度間合いを取れれば、リーチの差でこっちのほうが有利になる。
つまり、いかに近づかせないかが勝負の分かれ目となる。
それはわかっているのだ……いける！　そう思いながら、姉さんとにらみ合う。
そして先手を取ろうと一歩踏み出し、姉さんに横薙ぎの手刀を当てようとした瞬間。
「おっはよう、二人とも！」
突然の襲撃者に姉さんもろとも抱きしめられて、身動きが取れなくなっていた。
「むぎゅう」
「わ、ひ、ヒロコさん？」
僕は思わず、僕らを抱きしめた人の名前を呼ぶ。
「そのとおり、みんな大好きヒロコさんですよっと。二人とも、朝から元気そうね？」
姉さんは顔がヒロコさんの胸に埋もれてしまっていて、まともに喋ることすら出来ないようだった。
桜ノ宮広子（サクラノミヤヒロコ）。
姉さんと同じく三年生で、僕と姉さんが所属している放送部の副部長だ（ちなみに部長は姉さん）。
豹のような妖艶で深みのある瞳と、綺麗と表現するのが相応しい整った顔立ち。
背は僕より少し高いくらいで、出るところは出ていて引っ込むところは引っ込んでいる、女性としては一つの完成型と言える理想的な体型。
髪型はショートカットで口調もどこか男っぽいのだが、色気のある声とついつい目がいく大きな胸で性別を間違われることはまずな

いだろう。
もう一度言うが、これで姉さんと同い年である。
正直僕も信じられない。なんというか両極端な二人だと思う。
「えっと、おはようございます」
ヒロコさんの乱入で戦意を失った僕は、ヒロコさんのホールドから抜け出しつつ挨拶をした。
「うん、おはよう！　そして弟くんはちゃんと挨拶したのに、お姉ちゃんは挨拶しないってのはどういうことなの、マドカ？」
ヒロコさんは元気に返しつつ、相変わらず顔を胸にうずめたままの姉さんに話しかける。
「むぎゅー！」
姉さんが何か言っている。
というか、良く見るとヒロコさんの肩をタップしている。
凄く、必死そうに。
もしや、と思って僕はヒロコさんの顔を見る。
なんかいやらしい笑みを浮かべていた。
……ああ。つまりヒロコさん、姉さんで遊んでいるのか。
こんな時、弟として僕がとるべき行動は一つだ。
「じゃあヒロコさん、僕、先に行きますね」
迷わずエスケープ。
ほら、昔から触らぬ神に祟り無しって言うしね。
「待った」
しかし止められてしまう。
「なんでしょう」
僕は迷わず、心底嫌そうに返した。
もちろん嫌な予感しかしないからだ。
「お姉さんが苦しんでるみたいだけど、放っておいていいの？」
僕の予感通り、ヒロコさんは挑発するような目で僕に面倒なことを言ってくる。
「じゃあ放してあげてください」

ため息混じりに僕はそう返す。
すると、ヒロコさんはニヤリ、という嫌な笑みを浮かべて。
「ど・こ・か・ら？」
なんてことを、無駄に色っぽく、わざわざ僕の耳元で囁きやがった。
どうやらヒロコさん、中学を卒業してすぐのいたいけな男子高校生に、女子高生に面と向かって「胸」と言わせたいらしい。
こ、このセクハラ野郎め……いや野郎じゃないけど。
「……む、ねから……」
なんだか恥ずかしくなって、顔を逸らしながら言う。
「きこえなーい」
そんな控えめな僕に、ヒロコさんは凄く愉しそうな調子で返した。
ああ！
「ヒロコさんの、む、胸から姉さんを放してあげてください！」
半ばやけくそ気味に言い放つ。
「はーいはい、っと♪」
それを聞いて満足したのか、ようやくヒロコさんは腕のチカラを解いて姉さんを解放する。
「きゅう……」
どうやら息すら出来ていなかったらしく、姉さんが目を回していた。
「はっはっは、うん、やっぱ君ら姉弟はからかいがいがあるねえ」
嬉しそうに言ったヒロコさんをとりあえず睨みつけておく。ヒロコさんはいつもこんな調子だ。
「カズマもわざわざ、胸、って言ってくれるし。『腕』って言えばいいのに」
そしてすぐに視線を逸らした。
自分でも顔が赤くなっているのがわかる。
くそう、ヒロコさんが普段エロいことばっかり言ってるから、ど

うしてもそっちに意識が……ッ！
さらに僕の考えていることもお見通しらしく、ヒロコさんはまたニヤニヤといやらしい笑みを浮かべていた。
「さてと、じゃ今朝はこの辺にしておくかな。じゃあ二人とも、また部活で！」
それで満足したらしく、ヒロコさんはそう言い残して、あっさり行ってしまった。
僕はその後、少しふらついている姉さんを軽く介抱してから学校まで走ったのだった。

一限目終了後の休み時間。
「おはようございます、カズマさん。お疲れのようですね？」
自分の机に突っ伏して、だらーっとしていた僕に、声がかけられる。
のんびり弾いたピアノのような、聞いているとどこか落ち着く綺麗な声だった。
「おはよう、シズネ」
僕は声の主の名前を呼びながら、ゆっくりと身体を起こす。
顔を上げて、声の主を見る。
そこには、姉さんともヒロコさんとも違う雰囲気を持つ少女がいた。
桜ノ宮静音（シズネ）。
身長は僕より拳一つ分くらい低いのだが、髪は長く腰辺りまでで、ストレートにしてある。
艶があって、さらさらで綺麗な黒髪なので、そのシンプルな髪型はむしろよく似合っていた。
顔の特徴としては、少し眠そうなたれ目と、銀縁の眼鏡。
さらに標準装備の笑顔が朗らかな雰囲気をかもし出していて、一緒にいるとなんだか落ち着く。

これでヒロコさんの妹だというのだから驚きだ。
「駄目ですよ、カズマさん。夜は早めに寝ておかないと、翌日が辛いですよ？」
「いや、別に夜更かししたわけじゃないんだけど……」
ぐったりしているのは貴女の姉が原因です、とは思っても言わない。
「そうそう、マドカさんに勧められて深夜3時くらいにやってるアニメを観てみたんですが……けっこう面白いですね」
「ちょっと待て、さっき自分が何を言ったか思い出すんだ」
思わず突っ込む。
対するシズネは何がおかしいのか気付いていないようで、不思議そうに首をかしげていた。
その仕草は可愛らしいのだが、それを堪能するより先に僕は前言を一つ撤回しておこうと思う。
シズネは落ち着きがあって優しいという、1つの『理想の女の子』を地で行っているような節があるのだが、いかんせんマイペースすぎて会話のキャッチボールが成立しないという目を瞑りがたい欠点がある。
つまりまともに会話していると疲れるのだ。突っ込む点が多すぎて。
「それにしても……最近は、下着を着けないのが普通なのでしょうか」
「は？」
ああ、またシズネさんが何か言い出した。
「昨晩観ていたアニメで、角度的に下着が見えているはずの場面があったんですが、肌の色しか映っていなくて」
……なんて説明したらいいんだろう。
っていうか、僕も姉さんに誘われてたまに観てはいるんだけど、興味無いやつは流し見だったりウトウトしながらだったりするのであまり詳しくはない。

姉さんに聞いたら詳しく語ってくれそうな気もするんだけど。
ってかシズネさんどこを見てるんですか。やっぱりこの人、ヒロコさんの妹だ。
「えっと……」
「そうそう、昨日のお夕飯なんですが――」
「おおーい！」
返答を迷っている間（数えてなかったけど多分十秒未満）に次の話題に移ってしまった。
まあ答えも思いつかないしいいか。
そのまま相槌という名の突っ込みを返しながら、僕は楽しくも疲れる休み時間を過ごしたのだった。

そんな感じで午前中の授業が終わり、昼休み。
他のクラスメイトたちが弁当箱を開いたり購買や食堂に向かって走り出す中、シズネも僕に声をかけてくる。
「参りましょうか、カズマさん」
「うん、行こう」
簡潔に返す僕。
どこになんて聞き返す必要は無い。
行き先は、既に決まっているから。
そう。
僕と姉さんと、ヒロコさんだけでは無い。
シズネもまた、放送部のメンバーなのだ。

――続く。

第０１話：５月上旬、火曜日（後書き）

初投稿作品、いかがだったでしょうか。
楽しんでいただけたのなら幸いです。

第０２話：５月上旬、火曜日２（前書き）

時系列的には１話の直後。

２０１１年１２月２６日に一部推敲、加筆修正をしました。

第０２話：５月上旬、火曜日２

昼休み。
僕は放送部の一員として、放送室にいた。
というか今着いた。
室内では、既に二人の先輩が今日の放送の準備を始めている。
一人は良い意味で高校生っぽくないグラマラスな外見と、セクハラエロオヤジな内面を持つ副部長、ヒロコさんこと桜ノ宮広子（サクラノミヤ）。
もう一人は小柄すぎて小学生にしか見えない三年生で放送部の部長、姉さんこと門真円（カドママドカ）。
二人とも今は、ちょうど今日使う予定の資料を選出しているところだった。
「あれ、シズネは？」
現れたのが僕一人だったのが不思議だったのか、着くと同時にヒロコさんが僕にそう訊ねてくる。
「もうすぐ来ると思いますよ。ちょっと寄り道していく、って言ってましたし」
確かに教室を出た時は一緒だった。ただ途中で別行動になっただけだ。
「寄り道か……トイレだな。あの子昔からそう言うし」
「ヒロコ……それは察しても言わないであげてよ」
ヒロコさんの余計な明言化に、姉さんが呆れ気味に突っ込む。
「いや、そう言っておけば、今度シズネがそう言ったときにカズマが想像するじゃん」
するとヒロコさんは、愉しそうにそう言い放った。
「……」
ヒロコさんのセクハラ発言はいつものことなので、僕は反応せずスルーすることにした。
「カズマもそこで顔を赤くしない！」

……スルー出来ていなかった。
というか姉さん、指摘しないで。スルーしたいんだから。
「あ、シズネちゃん。こんにちは」
とか思っていると、今度は僕の背後に向かって挨拶した。
振り返ると、そこには清楚で可憐なお嬢様という感じの少女、同じクラスのシズネがいた。
「こんにちは。あれ、カズマさん、顔が赤いですよ？　具合でも悪いんですか？」
「な、なんでもないよ！」
僕の顔を見て不思議に思ったのか、シズネは訊ねてくる。
言ってるそばからシズネが現れて動揺したのか、どう考えても怪しい返事をしてしまった。
「そうですか……キョウさんとメイさんはまだなんですか？」
しかし相手はやっぱりシズネだった。
僕の怪しすぎる対応を気にする様子も無く、すぐに自分に興味のある話題を持ち出している。
たまにこの図太さというかマイペースさが羨ましくなるのは内緒だ。
「んー、何も訊いてないし、そろそろ来るんじゃない？」
その問いに、姉さんがやや投げやりに答えた。
「んー、でもちょっと遅すぎない？　キョウさんたち、何かあったんじゃ」
気になったので訊ねた、その直後。
「呼んだか？　カズマ」
「カズマ、邪魔。そこどいて！」
それに答えるように、背後から二つの声が聴こえた。
一つはだるそうだがどこか温かみのある、男らしい低い声。
もう一つはハキハキしていて良く通る、女の子の声だ。
振り返ると、ドアのすぐ前に見慣れてきた二人の先輩が立っていた。

一方は守口響（モリグチキョウ）。僕より一つ上、二年生の先輩だ。
身長はぱっと見で１８０ｃｍくらいと僕より高いのだが、体つきは中肉中背な体格の僕と同等くらいかそれ以上に細い。
しかしお昼の放送中２０分間、ずっとＢＧＭ担当としてギターを掻き鳴らしていることを考えると、痩せているのではなくて、余分な肉がつきにくい体質なのだろう。
顔つきも細めで、美形といえるくらいに整っている。
だが目が隠れるほどに長い前髪とどこか気だるそうな表情で、初見だと近寄りがたいくらいに怖い雰囲気がある。
その物憂げな表情などで女生徒に人気らしいのだが、彼女がいるという話は聞いたことがない。
そしてもう１人、は守口鳴（メイ）。
キョウさんの双子の妹らしく、顔つきもキョウさんを少し丸くしたような感じになっている。
キョウさんに比べると少し幼い感じがするが、それがむしろ女の子としての可愛らしさを引き立てていて、可愛いとも綺麗ともいえる顔立ちになっていた。
身長は姉さんより拳二つ分くらい高くて、髪は後ろをピンクのリボンで縛ってポニーテールにしてある。
リボンは姉さんと違ってそれが標準なのか、今までに違うリボンをしているのを見たことがない。
また体つきは森口家の遺伝なのか、キョウさん同様にかなり細い。
スリーサイズはぶっちゃけ幼児体型な姉さんと互角だ。
……遠回しに表現したら、かえってわかりにくくなった気がする。
というわけでストレートに言い直そう。
かなりの貧乳だ。
ぼん、きゅ、ぼん、って表現に倣って表すならきゅ、きゅ、きゅ、って感じ。
顔つきもちょっと凛々しいところがあるので、ボーイッシュな格好をしたら性別を間違えられるかもしれな……

「カズマ。今何か、失礼なこと考えてない？」
「い、いえ！　何も！」
そんなことを考えていると、メイさんに睨まれた。
鋭い……。
「まあまあ。みんなそろったんだし、始めようよ」
そんなメイさんの視線に気付いたのか、姉さんが全員に向けて言い放った。
メイさんは渋々といった感じだが、それに従い、はい、と簡潔に返事をしてから持ち場に移動する。それに連なって、他のメンバーもわかりましただのはーいだのおうよ、だのと各々が返事をして持ち場に移動していた。
僕と姉さんはマイクのある席。
その少し後ろにＢＧＭ担当のキョウさんがアコースティックギターを構えて、その辺のイスを引っ張り出してきて座る。
その隣に同じくイスを引っ張り出してきてメイさんが座り、ヒロコさんとシズネは少し離れたところで打ち合わせを始めた。
「よし、準備はできたね。始めるよ！」
言いながら、姉さんはマイクの横にある「Ｏｎ　Ａｉｒ」と書かれたボタンを押す。
さあ、お昼の放送スタートだ。

「やっほーみんな、元気ー？　放送部の部長、マドカでーす！」
姉さんがハイテンションに、マイクに向かって話しかける。
それと同時に、キョウさんがなんだか楽しそうな、三拍子の曲を奏でていた。
他の高校はどうなってるのか知らないが、僕らの『お昼の放送』はどこかラジオじみた雰囲気のものだ。
「部員のカズマです。今日は生徒会からの伝言はないので、早速最初のコーナーに入りたいと思います」

そう言いながら、姉さんに目で合図する。
「おれの話を聞けぇ！　略して！　オレハナのコーナー！」
僕の合図を見た姉さんは、舌っ足らずでありながらもハイテンションな声でタイトルコールをした。
でもその声で『おれ』って言うのはなんていうか微笑ましすぎると思う。
「イェーイ！」
そんなことを考えながら、僕も乗る。
「はい、皆さんからの投稿を読み、それについて語ったり、突っ込んだり、そのまま終わったりするオレハナのコーナーです」
そしてすかさず落ち着いた雰囲気を作り、『オレハナコーナー』の趣旨を解説した。
放送部の部室前には手紙を入れる穴が開いた木箱、通称目安箱が設置されている。
さらに僕らの放送は学園でも人気らしくて、毎回結構な数の手紙が来るのだ。
だから今では、放送時のコンテンツは全てその手紙を使ったものになっていた。
ちなみにコーナーは三つあり、兄弟姉妹ごとに一つを担当している。
そして僕と姉さんの担当がこの『オレハナコーナー』なのだ。
「じゃあカズマ、最初のお便り読むね。ペンネーム『かつて佐藤と呼ばれた鈴木』さん……ペンネームから突っ込むべき？」
なんというかアレなペンネームに、姉さんが意見を求めてきた。
「触れないでおいてあげようよ、きっと複雑な家庭事情があるんだよ」
各コーナーの時間は5分。
変に脱線すると時間が足りなくなるため、スルーさせるするつもりで僕は言う。
しかし姉さんはそれに感心したらしく、どこか寂しそうに「そだ

ね」と呟いてから再び手紙の朗読を再開した。
ごめん姉さん、そこで本当に複雑な家庭事情を想像しないであげて。
「『放送部の皆さん、こんにちは。最近、家で飼ってるミーアキャットのタマが可愛くてしかたありません』　あは、にゃんこ自慢だ」
冒頭を読み終えてから、姉さんが嬉しそうに感想を漏らした。
ウチにもファングという名前のトラネコがいるので、ネコの話題は親近感が沸くらしい……ってちょっと待て。
「姉さん、ミーアキャットはネコじゃない」
「え？　みーあ、って鳴くにゃんこじゃないの？」
心底不思議そうに姉さんはそう言った。
ちなみにこのバカ姉は本気でこの言葉を吐いている。
「違う！　ミーアキャットはマングース科だよ！」
「カズマ、詳しいな」
ギターを演奏しながら、感心したようにキョウさんが呟く。
「む」
その直後に何故か、メイさんに睨まれた。なんで？
「まぁいいか。えっと」
困惑する僕を放ったらかしにすることで強引に話を戻し、姉さんは続きを読み始めた。
お便りの内容を要約すると、ゲームをしていたり、本を読んでいたりするとミーアキャットが遊んで欲しそうにじゃれてくる、というものだった。
「あー、これはわかる。可愛いよね」
そして読み終えてすぐに、姉さんが嬉しそうに感想を漏らした。
隣を見ると、とてもいい笑顔をしている。
思い出してみれば、姉さんも家では同じような感じだった。
「ファングも、姉さんがリビングでごろごろしながらテレビ見てたらじゃれついてくるもんね。昨日も確か、うつ伏せに寝てる姉さんの背中に乗っていたっけ」

「ちょっとカズマ、余計なとこまで言わなくていいの！」
僕の言い草にどこか恥ずかしい点があったのか、姉さんは一転して赤い顔でそう言った。
あ、これは掘り下げると放送中に姉弟喧嘩をすることになりそうだ。
というわけで。
「思ったより長かったし、今日のオレハナのコーナーはここまでかな」
「カーズーマー！」
こういう時は、さらっと話を流すに限る。
「ほら姉さん、次のコーナー入るよ」
そう言いながら、シズネとヒロコさんに目で合図すると、それにいち早く気付いたヒロコさんが姉さんを押しのけてマイクに向かった。
「よーし、じゃあ次は！　ヒロコとシズネの！　お悩み相談、略してナヤソーのコーナー！」
そして手早く、自分たちが担当するコーナーのタイトルコールをする。
それにあわせて、僕と姉さんはマイクから離れた位置にある、待機中のメンバー用の席へと向かった。
「く……カズマ、ヒロコ……覚えてなさいよ……」
姉さんが何か言っていたが、今は気にしないことにした。
「匿名お悩み相談のコーナーは、文字通り匿名で寄せられたお悩みに、私たち桜ノ宮姉妹が答えるコーナーです」
シズネの解説を、ヒロコさんが引き継ぐ。
「ちなみに略称がオナソーでなくてナヤソーなのは、オナソーだとなんかエロいたッ！？」
昼食時に相応しくない発言をしようとしたヒロコさんに、姉さんが後ろから高速で水平チョップを叩き込んで黙らせる。
ブンッ、と風を切る音がし、ヒロコさんの……早すぎてよく見え

なかったが、多分後頭部を直撃したんだと思う。
「失礼しました。じゃあシズネちゃん、続きをお願いね」
そして妙に良い笑顔でシズネにそう告げて、再び待機メンバー用の後ろの席へと下がった。
……どうやら、さっきの仕返しも兼ねていたようだ。
「あ、はい。えっと、では最初のお便りを」
そしてシズネはシズネで特に気にすることも無く、淡々とコーナーを進めていた。
なんだかんだでシズネは大物だと思う。
「あ、アタシが読むよ」
と思ったら、あっさりヒロコさんは復活して横から手紙を奪い取り、読み始めた。
タフだなあ……。
「えーっと、ペンネーム『恋する乙女』さん。おお、恋愛相談だ」
その手の話題が好きなのか、ヒロコさんの声が弾んでいる。
「『放送部の皆さん、こんにちは』　こんにちは」
「こんにちは」
ヒロコさんが挨拶を返すのに合わせて、シズネも挨拶をする。
「『最近、好きな人が出来ました』　いいねぇいいねぇ。青春だねぇ」
ヒロコさん、なんていうか反応が女子高生じゃないです。
「『でも、その人には彼氏がいるみたいです。どうしたらいいのでしょうか』……か。うん」
一度沈黙するヒロコさん。
ちょっと考えているらしい。
「……ごめん、ちょっともう一回読む時間をください」
普段は姉御肌で言動も男らしいヒロコさんが、急に丁寧な喋り方でそう言った。
そして言うが早いか、黙って真剣な表情で手紙を読み直している。
良く見ると、冷や汗をかいている。

……僕も今のうちにちょっと今の内容を整理しようと思う。
えっと、投稿者が『恋する乙女』さん。ペンネームから察するに女性だろう。
そして悩みは。
好きな人が、彼氏がいるような人である、ということ。
彼氏……好きな人に、彼氏が、か……。
「……」
誰かフォローできる人はいないか、と思いながら全員の顔を見回す。
ヒロコさん本人は珍しく、難しそうな顔をしている。
仕方ないよね。僕も正直、なんて答えればいいのかわからない。
ヒロコさん同様にナヤソーコーナーの担当、シズネでもさすがにこれは困ってるに違いない……そう思って彼女に視線を移す。
すると、なんとシズネはなぜヒロコさんがそうしているのかが分かっていないようで、きょとんとしていた。
相変わらずの大物だが、フォローする気も無さそうだ。
キョウさんのギターも、さっきから曲が安定しておらず、ころころと変わっていた。
ＢＧＭの曲調を決めかねているようだ。
メイさんはペットボトルの水を飲んでいる。
姉さんはさっきの手紙で恋しくなったのか、携帯でファングの写真を見て微笑んでいた。
って、メイさんと姉さんは聞いてすらいない！？
なんていうか清々しいくらいに……ヒロコさんに助け舟を出せる人がいないことが確定した。
仕方ない。ここはヒロコさんの底力に期待しよう。
「……えーっと」
少しの沈黙の後、ヒロコさんが口を開く。
どうするんだろう。
ヒロコさんの判断は――

「好きなら奪い取っちゃえばいいと思うよ、うん。以上！　シズネ、次！」
強引に流した！
僕も人のことを言えないけど、うちの部は『強引に流す』という手段を愛用する人が多すぎだと思う。
「はい、じゃあ次のお便りは……」
そしてシズネもそれにあっさり応える。
なんていうか、豪胆な姉妹だった。

「はい、じゃあ今日のナヤソーコーナーはここまで！　みんなもなにか悩みがあったら、一人で悩まずアタシらに相談しろよ！」
もう一つの手紙に答えてから、ヒロコさんはそう締めくくった。
これで桜ノ宮姉妹担当のコーナーも終了だ。
桜ノ宮姉妹は後ろの席へ移動し、守口兄妹ことキョウさんとメイさんの二人がマイクに近づく。
「キョウと」
「メイの！」
「「うろおぼ演奏！」」
それから二人でタイトルコール。
盛り上げる前提のため、キョウさんは適当にギターをかき鳴らしていた。
「というわけで、うろおぼ演奏のコーナーです。このコーナーは、皆さんのリクエストした曲を俺のギターとメイのボーカルで再現する、そんなコーナーです」
まずキョウさんがコーナーの解説をする。
「本日は、ペンネーム『水木カナ大好き』さんのリクエスト、水木カナさんの『Ｈｕｇ　ａｎｄ　Ｌｏｖｅ！』です」
その後すぐ、メイさんが今日のリクエスト曲を発表した。
水木カナは最近流行りの女性アイドルだ。

また『Ｈｕｇ　ａｎｄ　Ｌｏｖｅ！』は恋する少女のまっすぐな気持ちを歌った歌で、テンポが良くて歌詞も可愛らしく、聴いていて楽しい。
「いくぞ、メイ」
ギターを構えたキョウさんが、メイさんに合図。
「ん。ワン、ツー」
それを受け、リズムをあわせるためのカウントをメイさんが始めて。
「「ワン、ツー、スリー、ハッ！」」
それに合わせてキョウさんの声が重なり、キョウさんのギターによる前奏から曲が始まる。
そして水木カナの曲は全体的に前奏が短いので、すぐに歌が入る。
「今すぐ君を♪　抱きしめたい♪」
メイさんは年齢相応の無垢な可愛らしさと、女性らしい綺麗な高音を絶妙に合わせ持った、いい声をしている。
姉さんも『可愛い声』をしてはいるのだが、どちらかといえば子ども特有の微笑ましさ、といった方がしっくりくるのだ。
「ｈｕｇ　ａｎｄ　Ｌｏｖｅ！　飛び込むからね♪」
また、『うろおぼ演奏』と言ってるわりには二人ともちゃんと練習してきているようで、かなり巧い。
完璧に原曲を再現できているわけではないのだが、どちらかがミスをしたときにもう片方が巧く合わせて、まるでそういうアレンジだ、とでもいうようにごまかして、平然と続けているのだ。
というか、僕自身も放送部に入ってしばらくはその『ごまかし』に気付いていなかった。
最近になってから、原曲からアレンジされていると思った時のメイさんの照れ笑いや、キョウさんのちょっとすまなそうな表情を見て勘付き。
さらに姉さんが『あ、またごまかしてる』と隣で茶化すように呟いたので確信できた、というのが正直なところだ。

「愛してあげるー！」
メイさんが最後のフレーズを叫ぶ。
そしてその興奮が冷めないままキョウさんがノリノリで後奏を弾き切って、演奏は終わった。
やっぱりこの二人は巧い。
「「水木カナの、『Ｈｕｇ　ａｎｄ　Ｌｏｖｅ！』でした！　ありがとうございました！」」
そして締めの挨拶を終始息ぴったりに決めて、今日のうろおぼ演奏のコーナーも終了である。
そして担当コーナーが終わると、キョウさんはマイクから離れてＢＧＭ担当に戻り、メイさんはその隣に移動した。
「さーて、本日もそろそろ、お別れの時間がやってまいりました」
そして部長として締めの挨拶をするべく、姉さんが再びマイクに向かった。
キョウさんもそれに合わせて、落ち着いた雰囲気の曲を奏でている。
ちなみに締めの挨拶は姉さんのみの担当なので、僕は下がったままである。
「担当はいつもどおり放送部全員、門真円、一馬、桜ノ宮広子、静音、守口響、鳴の六人でお送りしました」
こうやって真剣に締めの挨拶をしている姉さんを見ると、改めて姉さんが部長であることを再確認させられる。
普段は子どもっぽくてわがままで、バカな言動も多いけど。
それでもやっぱり、僕の姉で、先輩なんだなって思う。
だから僕は、姉さんが真面目に締めの挨拶をするこの瞬間がどこか好きだった。
「というわきゃで」
……感心してるときに噛まないでよ。
「こほん……というわけで。今日の放送はここまで！　次の放送をお楽しみに！　ありがとうございました！」

そして噛んだことをごまかそうとしているのか、少し早口で締めくくる。
やっぱ駄目だ、この姉。
……まあ、とりあえず。
本日の放送も、なんとか無事に終わったのであった。

――続く。

第０２話：５月上旬、火曜日２（後書き）

２話は以上になります。
楽しんでいただけたでしょうか？

第０３話：５月下旬、水曜日（前書き）

＊２０１１年１２月２６日に推敲、加筆修正を行いました。

第０３話：５月下旬、水曜日

水曜日、放課後。
僕、門真一馬（カドマ カズマ）は放送室の隣、放送準備室にいた。
放送準備室は放送部の部室だ。
元々は文字通り、放送時に使う小道具を置いておくところだったり、放送する人が発声練習するための場所だったらしいのだが、姉さんが一年生だった頃に放送部が占拠したとか不穏なエピソードを聞かされている。
しかしその後何も無く今に至っているため、特に問題はない……のだと思いたい。
信じることとって大事だよね。
室内にはいつも通り、放送部のメンバー全員が集まっているし。
「よーし、じゃあ定例部会、始めるよー」
そう言ったのは、見た目は子ども、中身も子どもな僕の姉さん。
服装次第では小学生と間違えられても不思議じゃない小柄さだがこれでも放送部の部長で、自慢のツインテールを今日は水色の玉がついた髪留めで止めていた。
ちなみに名前は門真円（カドママドカ）だ。
「じゃあとりあえず、目安箱開けるよ」
姉さんの開始の合図に答えて、姉さんの隣で木製の箱についていた南京錠を外したのは桜ノ宮広子（サクラノミヤヒロコ）さんだ。
姉さんと同じ３年生で副部長、色っぽいお姉さんという表現がしっくりくる人で、発言の傾向から歩くセクハラ親父の異名を持つ……僕が勝手に心の中で呼んでいるだけだけど。
部屋には長机が三つ、「コ」の字型に置かれていて、姉さんとヒロコさんは縦線に当たる位置に座っていた。
なんでもそこが３年生の固定席らしい。

ちょうど中心に近い位置なので、納得といえば納得かもしれない。
そんなことを考えていると、ヒロコさんが荒っぽい仕草で目安箱をひっくり返した。
中から50通くらいの手紙が落ちてくる。
もちろん、お昼の放送中のコーナー用のお手紙だ。
「今日はいつもより多いですね」
僕のちょうど対面にいる、細身でちょっと冷たそうな感じの2年生、守口響（モリグチキョウ）さんが手紙を見て呟くように言う。
声のトーンが独り言っぽかったので、返事をするかちょっと迷う。
「そうだね、キョウ♪」
その間に、代わりにキョウさんの隣にいたポニーテールの少女が。
どこか甘えるような声と仕草で反応した。
キョウさんの双子の妹、2年生の守口鳴（モリグチメイ）さんだ。
そう言い終えた後、メイさんが一瞬僕を睨んだ……ような気がした。
メイさんは人見知りする性質なのか、あるいは嫌われているのか、僕に対して何だか冷たい。
「じゃあいつも通り、分ける作業から始めましょうか」
それを敏感に感じ取った……わけではないだろう。
ほぼ確実に単なる偶然で、僕の隣に座っていた少女が口を開いてメイさんの険悪そうな雰囲気を弾き飛ばす。
綺麗で長い黒髪が特徴的な眼鏡っ子、上品で朗らかな雰囲気を持つ桜ノ宮静音（サクラノミヤシズネ）だ。
シズネは言いながら、既にいくつかの手紙に手を伸ばしていた。
手紙は各コーナーごとに形式が違って別々に書くようになっているため、コーナー別で分ける必要があるのだ。
目安箱の前には投稿用の用紙が置いてあり、四つ折にするとどのコーナー宛かを書く欄のみが見えるようになるという優れものだったりする……のだが、その機能に気付いていないのか変な折り方をして入れる人が多いため、結局は開いてみないと宛先がわからない

というやや残念なことになっているのだった。
まあ元々、５０通前後を６人がかり。たいした手間でもないのだが。
実際、分け切るまで5分もかかっていない。
「うーん、私ら宛が１４通でヒロコら宛が１６通、でメイちゃんら宛が２４通か。やっぱ人気だね、うろおぼ演奏」
そして仕分けた手紙を見て、姉さんが感想を漏らす。
「まあメイちゃんら巧いしね。とりあえず、手紙は各きょうだい持帰りでいいね？」
そのつぶやきに、ヒロコさんがフォローなのかよくわからないフォローをしつつ、質問を返す。
「あ、うん、かまわないよ。じゃ後は各きょうだい毎に、ってことで」
姉さんの声に、全員が返事をする。
僕ら放送部はちょうど家族別で三つに分けたりも出来るため、こういったことが出来るのだ。
というか、今年はそれ前提で担当コーナーが決まったらしい。
「さて、じゃ本題に入ろっか」
全員が手紙を仕舞ったのを確認してから、姉さんが再び言った。
そう、僕ら放送部の活動は、毎週火曜と木曜にやっているお昼の放送だけではないのだ。
姉さん曰く、僕らの通っている阿鳥学園ことアト学はイベントが多い。
特に文化祭が顕著で、なんと7月中旬と2月上旬の2回もあるのだ。
そして僕ら放送部はその2回の文化祭で、前編と後編に分けて1回ずつ放送劇をやるのが伝統になっている。
しかも、脚本までも部員たちで考えるところまでが伝統なのだ。
「ま、今年はまだ何も決まってないんだけどね」
しれっと姉さんが言い放った。

おい。
「大丈夫なの？　ヒロコさん、去年はこの時期、どの辺りまで決まってたんですか？」
不安になったので、僕はとりあえず姉さんと同じ三年生に訊ねる。
「そだな、去年は……マリナさんがテーマだけ決めてて、あらすじをみんなで考えて……コンセプトが決まったのが6月の頭くらいだったかな。だからこの時期だと、テーマくらいは決まってたと思う。あ、マリナさんってのは去年の部長ね」
「あー、マリナさん懐かしいな」
姉さんが反応した。
けっこう嬉しそうだ。
姉さんのみが高校にいた頃の話は結構右から左だったため、あまり覚えていない。
「そうですね。結構綺麗な方でしたし……って痛いな、何だよメイ」
同じくキョウさんも懐かしがるが、なぜかメイさんに足を踏まれていた。
「ふん、だ」
本人はそっぽを向いている。
「なんなんだよ……」
よくわからない、といった感じで不満そうにつぶやく。
もしかしてメイさん、『マリナさん』が嫌いだったんだろうか。
「まあ去年はそんな感じでマリナさんが一人で決めてたんだけど。今年はみんなであらすじ考えて、アタシが脚本書こうと思ってる。というわけで大雑把でもいいから決めていこうか。マドカ、何かある？」
守口兄妹が険悪になるのを避けるためか、すぐにヒロコさんが話題を振った。
「んー、童話のたぐいのアレンジ、とかの方がわかりやすいと思うんだけど。去年もそうだったしね」
姉さんが答える。

「ああ……そうだね、去年はシンデレラだったし。じゃ今年はラプンツェル？」
「どう派生したらそうなるのよ……却下。もうちょっと有名な作品の方がいいと思う」
ヒロコさんの第一案はあっさり姉さんに却下される。
ってかラプンツェルってどんな話だっけ……。
「じゃあ白雪姫とかどうですか」
それを聞いて、キョウさんが意見を出す。
「やるとしたら魔女役はヒロコだよね」
姉さんがにやり、と意地悪そうな笑みを浮かべて感想を言った。
「えー、だったらアタシよりむしろメイちゃんの方が……ごめん」
それにヒロコさんが反論するが、メイさんに睨まれて黙った。
……ヒロコさんすら黙らせる、メイさんの眼力半端じゃねえ。
「おやゆび姫やろうよ。もちろん主役は姉さんで」
便乗して僕も意見を出す。
「カーズーマー……何が言いたいの」
姉さんに睨まれた。
でも気にしない。
「おやゆび姫ってどんな話でしたっけ」
どうやら知らないらしく、シズネが訊ねてくる。
「んー、そういや私もちゃんとはおぼえてないなあ。主人公がちっちゃいってのはわかるけど……って、誰がちびだゴルァ！」
姉さんが一人で騒いでいた。いつでも楽しそうにしているなあ。
そんなことを考えながら、僕は答える。
「んー、大雑把にいうとチューリップから生まれた女の子が、いろんな動物に誘拐されるんだけど、最後は花の王子さまと幸せに暮らす、って話」
「ホントに大雑把ね……ってかそれも結構マイナーじゃない？」
僕が説明を終えると、メイさんが口を挟んだ。
「ねえお姉ちゃん。配役って私たちだけだっけ？」

そしてあらすじの感想もメイさんの意見もスルーしてシズネが口を開く。
「前言わなかったっけ……アタシらのみでやるのが最善だけど、去年は脚本的に人数が足りなかったから、演劇部に協力してもらったよ」
それにヒロコさんが答えた。
「確か去年の部長が演劇部の部長と仲良かったんでしたっけ」
「その通り。よく知ってたね、カズマ」
「姉さんに聞かされた気がするので」
とりあえず誇らしげに答える僕。
しかし実際は、それ以上詳しくは知らなかったりする。
というか覚えていない。
「なるほど」
「ヒロコさんとこは話さなかったんですか？」
なんとなく気になって訊ねてみる。
というか、桜ノ宮姉妹の日常会話が気になっていた。
品の良さで言えば対極というか両極な2人だし。
「ああ、まあシズネは雑談として話すとすぐ忘れるから」
「えー、そんなことないよお姉ちゃん」
ヒロコさんの発言に、シズネが抗議する。
「じゃあ昨日の晩御飯、覚えてる？」
「もちろん……」
ヒロコさんが試すように、シズネに質問する。
シズネは少し考える素振りをしてから、２０秒ほど考え込んだ後。
「えーっと、何の話だっけ」
笑顔でそんな答えを出していた。
なんていうか色々大丈夫か、シズネ……。

結局。
次の定例部会、つまり来週の月曜までに、各自で元にしたい話を探してくる、とだけ決めて今日は解散になった。
「よしカズマ、本屋よって帰ろうか」
「そだね。姉さんは絵本を探すんだよね」
「だーかーらー、あんたは姉さんに対して何が言いたいわけぇ？」
おちょくるように言うと、姉さんが怒りのオーラを発しながら僕を睨む。
「お、さすが門真姉弟。熱心だねえ。アタシらはどうする？」
そんな僕らのやり取りを聞いて、ヒロコさんはシズネに訊ねる。
「今日はいいんじゃないかなあ。わたしは明後日に集めてる小説の新刊でるから、そのときに探すつもりなんだけど」
「あー、そういやアタシも明後日に集めてるやつ出るわ。そだなぁ、今日はまっすぐ帰ろっか」
「うん。じゃあ皆さん、また明日です」
「おつかれー」
そう言い残してから、桜ノ宮姉妹は去っていった。
……ヒロコさんとシズネで、『集めている小説』ときいて連想されるジャンルが違うのはなぜなんだろう。
「おつかれー。えっと、守口兄妹はどうするー？」
付いてくる？　というニュアンスをこめて姉さんは尋ねていた。
「そうですね……」
キョウさんはそう呟きながら、考えるように腕を組もうとした。
「いえ、メイたちは帰って明日の曲練習します」
しかしその腕は組みきる前にメイさんに絡み付かれ、片方だけが所在無げに浮くことになってしまった。
明日の曲、とはうろおぼ演奏用の曲のことだろう。
「メイ、別にそこまで急ぐ必要はないんじゃないか？」
自分が考えている間にさっさと答えを出されてしまったのが不服なのか、キョウさんはメイさんに言う。

「う……だ、だってまだ曲決まってないじゃん」
「いつもどおり、既に知ってる曲から選ぶんだしそんな時間いらないだろう」
「いるよ、えーと……ほら、長い曲とかあったりするし」
「そんな長いの、逆に使えないだろ」
ああ、なんかケンカが始まっちゃった。
「ほーら、2人ともそこまで。まったくもう、しょうがないなあ」
姉さんが仲裁するため、2人の間に割って入る。
大人っぽいヒロコさんがやったら貫禄あったんだろうけど、姉さんがやると背伸びしているようでやっぱりどこか微笑ましい。
「部長、じゃまです」
しかもあっさりとメイさんに押しのけられている。
「うにゅ」
……いつも思うけど、姉さんってあんまり部長としての威厳ないよなあ。
なんで部長やってるんだろう。
「しょうがない。行こう、姉さん」
やむをえず、2人をおいて先に行く。
「むー……2人とも、戸締りお願いね」
不満そうに姉さんもそう言い残し、僕に続く。
部室の鍵は職員室においてあるものと部長である姉さんが持っているものの計2つだ。
そして今日は最初に来ていた守口兄妹が職員室から持ってきた鍵があるので、姉さんが先に帰っても施錠は行える。
というかぶっちゃけ、部室内に盗られて困るものというのはほとんどないため、施錠自体気分の問題だったりもするのだが。

そして。学校から歩いて5分、家からなら歩いて10分程度の位置に、本屋は存在する。

店の名前は……正直覚えていない。
学校周辺どころか家の近くに、本屋はここしかないからだ。
そのため、僕や姉さんみたいにこの辺に住んでいる人間にとっては本屋＝ここ、という認識が既に出来上がっている。
というか本屋、で通じるので、正式な店名を覚える必要性がまったく無いのだ。
またもう少し正確に言うと、本屋自体は学校付近のショッピングモールの中にある。
横幅は2店舗分のスペース、さらにこのショッピングモールで唯一の3階建てと、ショッピングモール内でも断トツの広さだ。
品揃えも相応に整っており、他の本屋を探す必要が無いことも本屋＝ここ、という認識を強めていた。
「私は1階で探すけど。カズマはどうする？」
「僕は上から見て回るよ」
姉さんは放送劇の原題を探すのに専念するようだ。
僕はいつもどおり、マイペースに見て回る気満々である。
自分で言うのもなんだが、僕はけっこう読書家だ。
読む本自体は特にこだわりはないのだが、とにかくカバンに何冊か入ってないと落ち着かない、そんな性質である。
それを姉さんに言ったら、「どこの活字中毒者よ」と呆れられたけど。
まあ、そういうわけで。
当然、ここにもしょっちゅう来ているため、ここを効率良く回るための道順みたいなのは既に自分の中で決まっていた。
具体的には最初に最上階へ行き、上から順番に見ていくのが僕のスタイルだ。
3階は料理本やビジネス向けのものといった、実用書のたぐいが多い。
また成人向けの雑誌等も置かれており、色んな意味で大人向けのコーナーになっている。

成人向けの本はそろそろ隠す場所がなくなってきたからスルーして、実用書の新刊を中心に、タイトル等から面白そうなのを探した。
とりあえず『これで終わり……では終わらない』というハードカバーの本が気になったので、手に取ってみる。
ビニールでぴっちりと封をされており、立ち読みが出来なかった。
しかも値段は２０００円と地味に高い。
なんだか気になる。
気になるのだが……見なかったことにした。
やっぱり普通の高校生である僕にとっては、２０００円は大金だしね。
次に手に取ったのは『人の心をつかむ人身掌握術２１』という文庫本だ。
普通に立ち読みできる状態だったので、パラパラと最初の方だけ読んでみる。
似たようなのを前に読んだ気がする。
今日は真新しいものを探したい気分だったので、深く読まずに本棚に戻した。
そんな感じで３０分ほど見回っていたが、姉さんを待たせているかもしれないことを思い出して２階に降りる。
２階は漫画やラノベといった、若い世代向けの本が多い。
集めているラノベや漫画の新刊はまだ出ていないし、あんまり長居しても姉さんが怒るだけなので素直に１階に降りることにした。
１階は週刊誌や月刊誌、子供向けの絵本や参考書、文房具が置いてある。
階段を降りながら、既に１冊の絵本を熱心そうに読んでいる姉さんを見つけていたのでそのまま駆け寄った。
見ているのはきっと、原題用の作品だろう。
集中しているのか僕に気付いていないみたいなので、そのままそっと観察する。
読んでいた本は……『クトゥルフ神話』だった。

「何をやる気なんだよ！」
「ひゃあ！？」
黙って見守るつもりだったが、思わず突っ込んでしまった。
姉さんは驚いたようで、一瞬本を落としかけていたが、ぎりぎりのところでキャッチしている。
なんだかんだで反射神経の良い姉である。
「もう、カズマぁ！　いきなり声かけたらびっくりするでしょ！」
「ごめんって。でも姉さん、さすがにクトゥルフ神話は無理じゃないかな」
謝りつつ駄目押し。
クトゥルフって人ですらないし。
そもそも演じれるものなんだろうか……。
「私も流石にこれをやろうっていう気はないよ。ただちょっと、最近見たアニメでチラッと出てたから気になってて」
僕の指摘に、呆れたような照れたような仕草で姉さんは答える。
顔を少し赤くして、もじもじしながら恥らう様は少し可愛いと思った。
でも発言が内容が残念すぎる上に、なんだかんだ言っても血の繋がった実の姉である。
あまり気にせず、僕はさっさと本題を訊ねることにした。
「それで、姉さんの候補は決まったの？」
「まあ一応ね。これとかどうかな」
そう言って姉さんが掲げたのは、『アーサー王物語』だった。
「……けっこう長くない？」
放送劇は前編後編あわせても2時間程度だ。
アーサー王物語を2時間でやるのは、少々無理があるのではないだろうか。
「愛があればいけるよ！」
目を輝かせていう姉さん。
多分これを挙げてるのもアニメの影響なんだろう。

「却下」
「えー……面白いのに。じゃあこれは？」
次に取り出したのは……
「都市……伝説？」
最近の都市伝説について――そんなタイトルの本だった。
「うん、色んなのが載ってあるし、どれか掘り下げたら面白いんじゃないかなって」
姉さんにしてはまともな案だ。
都市伝説はメジャーなものからマイナーなものまで色々ある。
巧くやればいい作品ができそうな気がした。
「なるほど……いいね。僕も手伝うよ」
「うん、お願い。じゃあ、ちょっと買ってくるね」
「わかった、外で待ってる」
僕の返事に頷き、姉さんは本を両手で抱えてレジへと向うのだった。
……実は僕個人で候補を探すの、声を掛けるまで忘れていたので助かったというのは内緒である。
便乗できてよかった。

――続く。

第０４話：５月下旬、水曜日～木曜日（前書き）

マドカが買った本の内容は？
そしてキョウとメイの日常が垣間見れる第４話。

お楽しみください。

＊２０１１年１２月２６日に推敲、加筆修正を行いました。

第０４話：５月下旬、水曜日～木曜日

姉さんが本屋で都市伝説に関する本を見つけてきた日、夜。
夕飯を終え、さらに風呂から上がって、ベッドに寝転がりながら本を読んでいると。
ドンドン、という荒っぽいノックの音が聴こえてきた。
「カズマ、いい？」
そして僕が返事をするより早く、ドアが開けられる。
年頃の男の子の部屋に、何の遠慮もなく立ち入ってくるのは……言うまでもなく僕の姉さんだ。
僕の後に入ったのだろう、姉さんは風呂上がりなのが一目でわかる上気した顔をして、さらにお気に入りらしい三毛猫模様のパジャマに身を包んでいた。
しかもうちで飼っているトラネコ、ファングも一緒だ。
姉さんがドアを開けたときに、するりと僕の部屋に入ってきたのだ。
「ドアを開けるのは返事してからにしてよ……」
とりあえず文句は言っておく。
まあ正直、今夜姉さんが部屋に来ることは予想していたので特に問題は無かったのだが。
……具体的に言うと、見られたらアレな本とかＤＶＤはちゃんと隠してある。
「まあまあ。じゃ早速、付き合って」
そんな僕の考えを推測するそぶりも見せずに、姉さんは嬉しそうに本屋で買っていた都市伝説の本を僕に見せつけた。
同時にファングが「なー」と鳴く。
普通猫の鳴き声って文字で表したら「にゃー」になると思うのだが、うちのファングの鳴き声はどう聴いても「なー」だったりする。
いや、別にどうでもいいことなんだけど。

「いいよ」
どうでもいいことに思考を巡らせつつ、僕は姉さんの誘いを快諾した。
というか、元々そのつもりだったのだ。
僕の答えで姉さんは機嫌を良くしたのか、嬉しそうに僕のベッドのふちに座ると、ぽんぽん、と自分が座っているすぐ横を叩いた。
隣に座れ、という合図だ。
僕が動こうとすると、先にファングがその合図に応えて、姉さんが指示した位置でごろんと丸くなった。
姉さんはそれを見て少し微笑み、ファングをひょいと持ち上げて膝の上に乗せて、僕の方を見る。
早く来なさい、と目で訴えかけていた。
「はいはい」
膝の上で不満げになーなー鳴いているファングを無視しつつ、僕も姉さんに応える。
腰掛けたのを見計らってから、姉さんが僕にもたれかかってきた。
姉さんが小柄なだけあって重くはないが、ややうっとおしい。
そろそろ暖かいを通り越して暑い季節になってきたし。
しかし、昔この状態で姉さんを離そうとして軽く弾いたら、そのまま戻る、弾く→戻る、また弾く→また戻ると無限ループになったことがあるので、それ以来大人しく肩を貸すことにしている。
ベッドは壁際に置いてあるのだから、もたれたいなら奥に座ればいいのに……。
「ふふん♪」
僕に抵抗する気がないのを察したのか、姉さんは上機嫌なまま本を開いた。
本はB5サイズとあまり大きくないため、ある程度密着しないと読めない。
「……」
「……」

しばらくの間、無言になってページをめくり続けた。
内容的には首なしライダーや人の缶詰といった、ホラー要素の強いものが多かったように思う。
しかもわざわざ不気味なイラストが付いているせいで色々想像させられてしまい、結構怖かった。
そしてなんとなく。
お互い最初から無言だったせいか、先に口を開いたら負け……という感じの雰囲気になってしまっていて。
結局2人とも途中一言も喋らないまま、本を読み終えた。
「……」
読み終わっても、姉さんはまだ口を開こうとする気配がない。
僕はもういいかと思って、姉さんに言葉を投げ掛けることにした。
「どうしたの？」
「いや、んー……えっと……」
とりあえず声をかけても、姉さんはなんと言ったらいいのかわからない、そんな感じの反応をする。
「どれかベースにしたい話はあった？」
待っていても進展しなさそうだったので、もう少し具体的に話題を振る。
「……」
だが返答は無い。
改めて姉さんの顔を見ると……その顔色は、やや青ざめているように見えた。
……もしかして。
「姉さん……もしかして、怖かった？」
からかうつもりは無く、むしろ心配してそう訊ねたのだが。
「こ、怖くなんかないよ！　そういうカズマだって怖いんじゃないの！？」
キレられた。
このバカ姉……せっかく人が、親切で言ってあげてるってのに！

「そんなわけないだろ！　こんな子ども騙しで怖がるの、姉さんくらいだよ！」
「誰が子どもよ！」
そう言いながら、手元にあった僕の枕を投げつけてくる姉さん。
枕は僕の顔に当たり、一瞬目の前が真っ暗になる。
そして枕が落ち、再び視界が広がった頃には、部屋には姉さんの姿はなかった。
直前に聴こえた足音から察するに、自分の部屋に戻ったのだろう。
――もういい、知るもんか。
そう思いながら、僕は部屋の電気を消し、不貞寝した。

朝。
目の光を顔に感じて意識が戻る。
あのまま眠ってしまったため、雨戸が開きっぱなしになっていたようだ。
太陽光が僕の顔面に直撃している。
眩しすぎる……このままでは寝られない。
寝ぼけた頭でそれだけ考えた僕は寝返りを打つ。
すると、何か柔らかくて暖かいものに触れた。
目を閉じたまま、それが何かを探るため手に意識を集中する。
そこにあったのは、ふさふさした体毛に覆われた、柔らかい感触だった。
……どうやら知らない間に、ファングが僕のベッドにもぐりこんでいたらしい。
そういえば昨日、姉さんが部屋から飛び出した時にはまだ部屋にいた気がする。
ということは、閉じ込めてしまっていたのかな……。
ぐだぐだと、寝起きのあまり回っていない頭で考えていると、「すぅ……」と寝息が聞こえてきた。

明らかに人のものだ。
まさかと思いながらも、僕は目を開ける。
目の前に、姉さんの顔のアップがあった。
「うわあ！？」
慌てて飛び起き、勢いに任せて掛け布団を剥ぎ取る。
そこには、可愛らしい三毛猫模様のパジャマのまま、猫のように丸くなって眠る姉さんの姿があった。
「もう……なに……？」
姉さんは、寝ぼけた声で返事をしていた。
「なに？　じゃないよ！　なんでここで寝てるのさ！」
昨日の今日でカッとなった僕は、迷わず姉さんを怒鳴りつけた。
「……」
姉さんは気まずそうに、顔を赤らめてそっぽを向いた。
「……」
僕も黙って、姉さんの返答を待つ。
しばしの沈黙の後、姉さんがとった行動は……
「……あ、あれは人を怖がらせるための本なんだから！　これが自然な反応なのよ！！」
逆ギレだった。
しかし内心恥ずかしいのだろう、顔が真っ赤だ。
「あー、はいはい……」
それを見たら、なんだか怒るのもバカらしくなって。
僕もそこから、あえて追求はせずに。
姉さんがまだ言い訳がましく何か言っていたが、それも適当に聞き流して。
いつものように、二人で学校へと向かうのだった。

それから。
昼休みの放送はいつも通り（お察しください）にこなした木曜日

の放課後。
担任がいつも通り帰りのＨＲを適当に終わらせて去っていったのとほぼ同時に、キョウさんからメールが来た。
『今から一緒に、ゲーセンいかないか？』
キョウさんはゲーセンに行くのが趣味らしく（やっているのはだいたい音ゲー）、最近はよく僕を誘ってくれる。
ケータイのカレンダーを確認。
今日、この後は特に用事もない。
……よし、前フルボッコにされた格ゲーの、リベンジマッチを挑むとしよう。
そんな想いを胸に秘めて、僕はすぐに『行きます！』と返信した。
すると。
「よし、じゃあ早速行こうか」
「うわあ！？」
後ろから、いきなり声が聞こえてきた。
振り向くとそこには、機嫌良さそうに微笑んでいるキョウさんの姿が。
「よう、カズマ。驚いたか？」
「驚きますよ……ってか何で返信とほぼ同時に声を掛けてくるんですか」
とりあえずツッコんでおく。
「ああ、実は教室の影でずっと張ってたんでな。行こうぜ」
言いながら、キョウさんはどこかそわそわしている。
まるで、何かに追われているような……。
あ、もしかして。
「そういえばキョウさん……」
メイさんは一緒じゃないんですか？　と訊ねようとした、その時。
「準備できたな？　行くぞ！」
僕の言葉はあっさりと遮られ……
「って、うわあ！？」

そのまま、強引にゲーセンへと連れて行かれたのだった。

学校から歩いてなら１０分くらいのショッピングモールに、ゲーセンもある。

というか学校周辺のゲーセンもそこくらいしか無いため、僕ら阿鳥学園の生徒が『ゲーセン』と言ったら、だいたいここを指す（キョウさん談）。

ちなみにこのゲーセン、お世辞にも都会とは言いがたい町の雰囲気と違ってかなりゲームの揃えがいい。

首都圏や都市部にしか置いてなさそうなネット通信前提の筐体も、当然のように置いてあるのだ。

「けっこう空いてるみたいですね」

しかし、その割にはあんまり客は入っていなかった。

「この時間は穴場なんだよ。ＨＲ終わってすぐにダッシュで来たなら、な。混むのはこれからだ」

「なるほど……」

さすがはセンパイ、という感じだった。

キョウさんに連れてこられるまでゲーセンに通う習慣が無かった僕には、そこら辺の勝手はさっぱりなのだ。

「じゃあキョウさん、さっそく『ウエマ』やりましょうよ。この前のリベンジです」

「いいぜ。手加減はしないからな？」

僕がそう言うと、キョウさんは勝気な笑みを浮かべ返していた。

ウエマ……正式名称『ウエポンマスターズ』は最近出たばかりの対戦格闘ゲームである。

原作はラノベらしいのだが、微妙にレアなのか見つけられていない。

一回読んでみたいんだけどなあ……。

とまあ、それはさておき。

ゲームの特徴としては、開始時にキャラクターだけでなく、そのキャラクターが使う武器も選べるという点がまずは挙げられる。
プレイヤーキャラは6人と一般的な格闘ゲームにしては少なめなのだが、武器も6種類あって、キャラクター選択時にそれも別で選ぶ事になるため、使えるキャラクターのパターンは実質、6×6で36通りある。
僕が愛用しているのは加奈（かな）というキャラクターで、能力としてはパワーは無いけど小柄でスピーディ、トリッキーな動きで相手を翻弄するタイプ。
それに6種類ある武器の中で最も攻撃力が高いバトルアックスを持たせたタイプが、僕の主力になっている。
対するキョウさんは、高いパワーとスピードで相手を叩きつぶす、本編の主人公（らしい）、太一（たいち）を使ってくる。
キョウさんは原作を知っているらしく、装備も原作に従って双剣を選んでいる、とのことだった。
「さあ行くぜ、カズマ！」
「はい、キョウさん！」
キョウさんの合図で、僕とキョウさんの死闘が始まった。
先に仕掛けてきたのは、キョウさんだった。
ダッシュで一気に接近、斬りかかってくる。
僕は飛んでそれを回避、後ろに回り込んでバトルアックスで襲いかかった。
しかしそれは読まれていたらしく、あっさり中段ガードで止められてしまう。
だが、こっちもそこまでは想定済みだった。
すぐにしゃがんで、下段にローキックを叩きこむ。
加奈のスピードは全キャラ中でも最速だ。
だからこれは――読めていても、防ぐことが出来ない！
バシッ、というサウンドエフェクトと共に、相手にダメージが入った！

……最大ＨＰの５％くらい。
やっぱ加奈は、武器で攻撃しないとダメージが低いなあ……。
そんなことを思っていると。
「そう来るのを、待っていた」
キョウさんが、どこか嬉しそうにそう呟く。
「しまった……」
やばい――そう思った時には、もう遅い。
キョウさんは双剣の特性を最大限に活かして、攻撃を仕掛けてきた。
双剣の特性。
それは一撃の威力の低さを引き換えにした、全６種類の武器の中でも最高クラスの……連続攻撃の速さに他ならない。
ゼロ距離での、連続攻撃。
しかもキョウさんが使っている太一は、元々のパワーが高いため、双剣の攻撃力の無さは充分カバーできてしまうのだ。
その連続攻撃だけで、一気にＨＰの４分の３くらいを持っていかれてしまった。
やむを得ず、後ろに飛んで距離を取る。
まずい。
これでかなり不利になってしまった。
でも……高いスピードによる回避性能の高さが、僕の持ちキャラ、加奈の魅力だ。
ＨＰが０になるまでは……まだ、勝負は分からない。
ここから逆転勝ちすることだって、きっと出来る！
僕はそう信じて、スティックを握り直すのだった。

そして。
「……まあ、そうだよね」
結局。

あの後は、一撃も与えることなくあっさりと負けてしまった。
そもそも序盤に４分の３も食らってしまってる時点で、『回避性能の高さ』に信憑性なんてねーよ畜生。
「まだまだだな、カズマ」
嬉しそうに、キョウさんは勝ち誇った様子でそう言った。
「つ、次こそは勝ちます……」
完敗してしまった僕に言えるのは、それだけだった。
「まあ、そうしょげるなって。次ギタマやるから、ついてきてくれ」
「あ、はい」
ギタマ……ギターマイスターは、キョウさんお気に入りの音ゲーである。
ギター型のコントローラーを使って、曲に合わせてボタンを押していく、いわゆるリズムゲーという奴だ。
いつも放送室で散々、アコースティックギターを掻き鳴らしているはずなのに……まだ鳴らし足りないんだろうか。
「わかりました」
そんなことを密かに思いつつ、僕は素直についていった。
途中、ＵＦＯキャッチャーが目に入る。
中身は猫を丸っこくデフォルメした感じのぬいぐるみだった。
あれ取って帰ったら、姉さんが喜びそうだなあ……。
などと思っていると、ブーン、という振動音がかすかに聴こえてくる。
ポケットに上から手を当てて見るが、僕のケータイが震えているわけでは無さそうだった。
となると……
「キョウさん、ケータイ鳴ってません？」
厳密にはバイブレーションなので、『鳴っている』はおかしい気がするのだけど。
……日本語って難しいなあ。
「ん？　ああ、みたいだな」

と言いながらも、キョウさんはポケットからケータイを取り出そうとする素振りすら見せなかった。
「……良いんですか？」
念のため、聞いておくことに。
「ああ、大丈夫だ。メイからだしな」
「メイさんから？」
って、見なくても分かるの？
バイブレーションのパターンとかで区別しているんだろうか。
「ああ。どうせ『今どこにいるの』っていう電話だろ。あいつもいい加減、兄離れするべきだと思うんだけどな……」
「兄離れって……」
キョウさんの何気ない呟きを、僕は思わず拾ってしまっていた。
「あいつ、今でも俺にべったりだからな。いい加減兄離れしておかないと、彼氏とか出来ないと思うんだよ」
それに気付いたのか、キョウさんは続きを話してくれる。
「言われてみれば……確かにメイさん、うちの姉さんよりべったりな気がしますしね」
「だろ？」
僕が同意すると、キョウさんはようやく理解者が出てきた、とでも言いたげな感じで言葉を続けた。
「いつも俺に抱きついて甘えてくるし」
「あー……」
うちの姉さんも、中学生くらいまではそんな感じだったなあ。
……いや、今もか？
「それに俺の姿が見えない時は、どこで何をしているかを聞いてくるし」
「……うちはそれは無いですね」
ってかそれ、兄妹としてはおかしくないかな？
「しかも抱きついてくるの、学校とかでもお構いなしだぜ？　恥ずかしいからやめろ、っていつも言ってるんだけどなあ」

「うちの姉さんでも、さすがに人前ではやらないなあ……」
「極めつけに、この間は俺が風呂入っている時に一緒に入ろうとしてきたんだぜ？　もう子どもじゃないんだから、いい加減恥じらいとかを覚えてほしいんだがな……」
呆れたように、キョウさんはそう言った。
「うちの姉さんはむしろ、入浴中に風呂場に近づいただけで怒りますね……」
このヘンタイッ！　って。
色気という単語からは程遠い体つきをしているくせに……。
しかも血の繋がった姉なんだよ？
あれに欲情したら、確かにヘンタイだとは思うけど。
……ん？
そこまで内心で悪態をついてから、頭に何かが引っかかった。
というか、あることに勘付いてしまった。
「？　どうした、カズマ？」
それを敏感に感じ取ってくれたのか、キョウさんが声をかけてくれる。
「いや……ちょっと思ったんですけど」
もしかして、メイさんって……僕が率直に、思った事を言おうとしたその時。
「あああああああああああっ！　キョウッ！　やっぱりここだった！！」
ハキハキしていて通りの良い……通りが良すぎて、比喩表現でなく物理的に耳が痛くなるほどの騒音が聞こえてきた。
メイさん、やっぱり声量凄い。
「め、メイ？　どうしてここが？」
突然現れたメイさんを見て、キョウさんは困惑した様子で訊ねていた。
「なんで電話出ないのよ！」
対するメイさんは怒り心頭、といった感じだ。

ってかもう、会話が噛み合ってない！？
「しかもメイを差し置いて、カズマなんかと二人きりで出掛けて！」
そのままメイさんは、キョウさんに対してまくしたてる。
ってか『なんか』ってなんだ、『なんか』って。
「カズマは関係ないだろ！」
キョウさんも言い返す。
ってか何だろう、これ。
兄妹ゲンカって言うより……
「関係なくないもん！　メイより、カズマの方がいいっていうの！？」
もはや、痴話喧嘩だ。
もしかしてメイさんって、キョウさんのことが……。
２人のケンカを見ながら。
僕は密かに、そんな不穏なことを思うのであった。

――続く。

第０５話：６月上旬、月曜日（前書き）

ついに、今年の放送劇の原題を決める日がやってきた。
みんなが持ってきた案とは。
そして、最終的にカズマたちは何をすることになるのか？
第５話。
お楽しみください。

＊２０１１年１２月２６日に推敲、加筆修正を行いました。

第０５話：６月上旬、月曜日

放送部の部室内には今、放送部のメンバー６人、つまり全員が集まっていた。
今日もっとも大きな議題は、今年の放送劇の原題は決めることだ。
僕ら門真姉弟の案は土日に姉さんと話し合ったので、既に決まっている。
思いつく限りで最善のものを選んできたので、正直、自信があった。
後は他の人たちがどんなのを考えてきているかだけど……。
僕が黙考していると、姉さんが「それじゃあ始めるよ」と全員に合図をした。
「えーっと、兄弟姉妹で一つ考えてきたところってある？」
開始と同時に、ヒロコさんが全員に向かってそう訊ねる。
「うちはそうです」
まさに僕らのことだったので、迷わず肯定する。
「俺ンとこもそうです」
キョウさんも続いた。
これでウチと守口兄妹は確定だ。
「ヒロコさんのところは？」ヒロコさんの聞き方でなんとなく予測は付くが、一応訊ねる。
「アタシらもそうだから……結局、案は３つしか無いのか」
ヒロコさんはだいたい、僕が想像した通りの答えを返した。
「みたい。まー、部のメンバーが３組の兄弟姉妹だから、そうなっても仕方ないかなあ……」
ヒロコさんの言葉に、姉さんが苦笑いで同意する。
個人で案を用意している人が１人もいないので、誰もそのことに文句を言えなかった。

「ま、とりあえずはあるものから聞いていけば最終的には何か浮かぶでしょ。各家ごとに発表しよう。というわけで……シズネ」
先手必勝とでも言いたそうに、ヒロコさんは先陣を切ってシズネを促す。
「はい、お姉ちゃん。私たちで考えてきたのは、『不思議の国のアリス』です」
促されるままに、シズネは堂々と作品名を挙げた。
「あー、いいね。有名作品だし、大きく外れることが無さそう」
桜ノ宮姉妹から出てきたのは、有名な文学作品だった。
去年はシンデレラであったことを考えると充分に順当なのだが……桜ノ宮姉妹の言動は突飛なイメージがあるせいか、少し不思議だった。
正直もっと、斜め上のところでくると思っていたのだが。
「んー……思ったより無難な作品で来たね？」
姉さんも僕と同じことを思ったのか、率直にそれを口にする。
「あー、まぁなんていうか。シズネ相手だと、アタシがツッコミに回らざるをえなくなってさ」
ヒロコさんは、一度軽くため息を吐いてからくたびれたような表情と声で語り始めた。

土曜日夜の夕食時、桜ノ宮邸にて。
「ねーシズネ。結局今年の放送劇、何が良いと思う？」
シチューを口に運びながら、ヒロコはシズネに訊ねる。
「んー、クトゥルフ神話とかどうかなぁ。最近、それにちなんだアニメやっていたし」
「それ、どう再現するんだよ」
なぜか自信満々に語るシズネに、ヒロコが全力でツッコミを入れる。
クトゥルフ神話なんて詳しく知らないが、確か人外の物語だった

はずだ。
「……じゃあ、アーサー王物語は？」
「長すぎだって。上映時間は前半・後半あわせて1時間しかないからね？」
さっきよりはまともだが、それでも上映時間を考えるとそこまで壮大な物語をやるのは難しい。
去年・一昨年から脚本自体を手伝っていたため、どれくらいだと『長すぎ』なのかの目星はもうヒロコにはついている。
「んー……じゃあ日本の作品で……白雪姫とか？」
「んー、そっちだと短すぎかな。前回のシンデレラも、原作だけだと短すぎたから大分肉付けしてたし……原型が分からなくなるくらい」
去年の超展開が多発した放送劇を思い出し、ヒロコは密かに苦笑いをする。
ガラスの靴がぴったり合う人がシンデレラ以外にも何人か居たので、さらに細かい選定に入る……なんてシーンを考え、台本を書き切った先輩は今でもヒロコにとっては尊敬すべき人だ。
「じゃあ……もうちょっと長い作品の方がいいのかな。水滸伝とか」
「『ちょっと』どころじゃなく長くなった！　しかも何人要るんだよ、それ！」
キャストが108人以上必要な作品なんて、無茶振りもいいところだ。
「じゃあ……三国志？」
「水滸伝と同じ理由で却下！」
……そんなやり取りが夕食を終えてから、丸一日ほど続いて。
最終的には、ヒロコが去年候補として出ていたものの中から、一番無難そうなヤツを選んで強引に終了せざるを得なくなったのであった。

「……なんていうか、お疲れ様です」
ヒロコさんの簡潔な回想を聞いて、メイさんが苦笑いしながら辛うじてそう告げる。
「ええ、大変でしたよ～」
なぜかそれにシズネが応えた。
「大変にした張本人がねぎらいの言葉を受け取るなって……」
僕は呟くようにツッコむ。
あと、シズネの無邪気で無意識な無茶振りの前半部分が、姉さんがやりたそうにしていた案と同じなのはどういうことだ。
シズネも姉さんと同じようなアニメを観ているんだろうか。
「ちなみに不思議の国のアリスの場合、アリスは誰で考えてる？」
僕が割とどうでもいいことに思考を廻らす隣で、姉さんはヒロコさんに質問していた。
「あぁ、メイにやってもらうつもり。アタシはちょっとアダルティすぎるし、シズネだと緊張感出ないし」
ヒロコさんは最初から想定していたのか、それにすらすらと答える。
「私の場合も、あだるてぃーすぎるから？」
姉さんが懸命に色っぽい声を出して訊ねる。
しかしなんというか……中途半端すぎて、かえって微笑ましいものになってしまっていた。
「いや、マドカは幼すぎ」
「……」
しかもヒロコさんには普通にスルーされ、否定されてしまった。
……哀れだ。
「……なるほどね。えっと、キョウくんらは？」
やや凹みながら、姉さんは次にキョウさん達に訊ねる。
「あ、ハイ。俺たちは……メイの強い希望で、ロミオとジュリエットです」
メイさんの強い希望……

「ということは、配役はキョウさんがロミオでジュリエットがメイさんですか？」
嫌な予感がした僕は、とりあえずそう訊いた。
「ん？　ああ、よくわかったな」
僕の問いに、キョウさんは、感心した様子で頷いた。
なぜ分かったんだろうと思っていそうな、不思議そうな顔で。
……いや、メイさんあからさま過ぎでしょう。
なんで『なぜそれを言い当てられたのかが分からない』みたいな顔してるんですか。
そんなキョウさんの様子に、メイさんもなんとも形容しがたい微妙な表情をしていた。
「なるほどねー。じゃあそろそろ私らの番かな」
姉さんが意気揚々と立ち上がる。
姉さんも僕同様に、自信満々だったようだ。
「うちの学校にさ、七不思議ってあったよね。あれを題材に出来ないかなって」
姉さんはハキハキと、いつも以上に良く通る声でそう言った。
「あぁ、あったね」
姉さんの意見に、ヒロコさんが食いついた。
そう、要は『学園の七不思議』だ。
だいたいの学校にあるメジャーな話であるため、ある意味身近という点も相俟って面白いのではないか。
それが、以前買った都市伝説の本を眺めていて浮かんだアイデアだった。
「うちの学校、七不思議なんてあったんですか？」
シズネは聞いたことが無かったのか、おおよそ全員に向かってそう訊ねていた。
「ああ、いくつか聞いたことがあるぜ。夜中にブレイクダンスする人体模型とか、真夜中に逆再生されるチャイムとか」
シズネの質問に、キョウさんが答える。

「メイも知ってるよ。深夜2時、職員室の窓ガラスが全てマジックミラーになるとか真夜中の3時に二宮金次郎の像が薪でジャグリングを始めるとか」
メイさんも続けて話してくれた。
僕は一応、既に姉さんからひと通り聞かされていたので知っていたのだが……なんていうか。
うちの七不思議っていちいち突っ込みどころがあって素直に怖がれないんだよなあ……。
「深夜4時、グラウンドに巨大なダンスホールが浮かび上がって、学校で死んだ生徒や職員のゾンビや亡霊たちがダンスパーティをしている、なんてのもあるよね」
「……いつも思うけど微妙に楽しそうだよなあ」
姉さんがまだ上がってないのを言うと、ヒロコさんがぼそっと突っ込みを入れた。
「あとは……無限階段の計6つで全部でしたよね」
記憶を辿るように、キョウさんが最後の一つを挙げる。
「そだね。7つ目を知ってしまった人は、怪死してグラウンドのダンスホールに送られるから、知っている人間はいないって言われてる」
姉さんがそう言って、七不思議の概要を締めくくる。
「……怖いような、シュールすぎてむしろ笑えるような」
ヒロコさんが再びツッコミを呟いた。
「無限階段ってなんですか？」
七不思議についてまったく聞いたことのないシズネが、唯一名前だけではいまいち概要のつかめない『無限階段』について確認してくる。
「よくぞ聞いてくれました！」
その質問に、姉さんが嬉しそうに反応する。
まあ当然といえば当然だろう。
何しろ。

「何を隠そう、私たちが本筋にしようとしてるのはこの話なんだよ。なんだかんだで、これが一番深いからね」
……ということだ。
「そうなんですか？」
姉さんの断言に、シズネが不思議そうな反応を示した。
「うん。これだけ変に、ストーリーがしっかりしてるんだよね」
それにヒロコさんが補足する……というか語りだした。
「夜の８時。部活が終わって帰ろうとしたある生徒が、途中で忘れ物に気付いてね。最上階である３階にある教室に取りに行こうとしたんだけど……どれだけ階段を上っても、階段が途切れず、最上階に辿りつかないんだ」
ややおどろおどろしい雰囲気で、ヒロコさんが話を紡いでくれる。
普段明るくておおらかなヒロコさんだから、こういうダークな雰囲気を作って話すのは何だか新鮮だった。
「どれだけ階段を歩いても、ずっと踊り場に出ていて一向に上の階にたどり着かない。不安になって今度は下の階に向かって歩いた……というかもう、ほとんどパニックになって駆け下りてたらしいんだけど……やっぱりというか、今度は下の階にたどり着けない。ふとどれくらい時間が経ったのか気になって時計を見ると……デジタル時計は８：０８と表示されたまま、止まってたんだ」
「止まってた？」唯一詳細を知らないシズネが、続きを促すように訊ねる。
「うん。デジタル時計にはちゃんと、数字が映ってるんだよ。でも、秒の単位が０８のところで止まってて、ずっと見つめていても動かないのね。それでその子はもうどうしようもないくらいパニックになって……腕時計を外して、壁に投げつけたらしいの。そうしたら時計が壊れて、気付くと１階と２階の間の踊り場に立ってたんだって」
「……えーと、なんで？」特に怖がる様子も無く、シズネは淡々と訊ねていた。

「うーん、算用数字の『8』ってさ、90度傾けると∞（無限大）の記号になるじゃない？　だから、デジタル時計でもっとも多く、そして早く8が並ぶ瞬間である8時8分8秒に、それが起こったんじゃないかって言われてる。時計を壊したら、脱出できたっていうラストだしね。で、マドカ。これに肉付けして、話を作ればいいの？」

シズネに話し終えてから、ヒロコさんは姉さんにそう確認する。

「んー、そのつもりで考えてたんだけど……改めて聞くと短い気がしてきた」

少し考えてから姉さんが答える。

「そうですね……確かに、肉付けするにも短すぎると思います」

キョウさんが姉さんの懸念に同意した。

長すぎ、短すぎの感覚はさすがに一年生である僕には分からない。シズネも僕と同様らしく、きょとんとしていた。

「じゃあ、こういうのはどうですか？　一組のカップルが学校に迷い込んで、前編と後編でそれぞれ3つずつで6つの不思議を体験する、っての」

僕が戸惑っていると、メイさんがそんなことを言い出した。

「あー、それいいな。それで行こう！」

それにヒロコさんが食いつく。

脚本はヒロコさんがメインで書くことになっているため、最終的な決定権はヒロコさんが持っている。

彼女が『行こう』と言えば、それで決定だ。

「じゃ、決まりだね」

それを察した姉さんが、嬉しそうにそう言った。

「ああ。今年の放送部の演目は、『阿鳥学園七不思議』だ！」

ヒロコさんも、楽しそうに声を張り上げた。

メイさんも満足そうな顔をしているのは……考えないようにしよう。

とりあえず。

今年の放送部の演目は、無事決定したのであった。

そして、その日の帰り道。
「決まって良かったね」
他の４人と下駄箱や校門で別れてから。
僕は姉さんに話しかける。
「そうだね。ちょっと考えてたのとは違うのになったけど」
やや不満そうな内容の台詞を、姉さんは弾んだ声でそう言った。
なんだかんだ言っても、自分の持ってきた案が最終的な内容のベースになったことが嬉しいんだろう。
「にしても、カズマもいいの思い付いたよね。うちの学校に七不思議があったこと、知らなかったんでしょ？」
上機嫌なまま、姉さんは日曜日辺りの話を引っ張ってくる。
「んー、まあ去年まで行ってた中学にあったからね。もしかしたら高校にも、って思ったんだよ」
「さすが私の弟！　姉さん鼻が高いよー」
僕が答えると、姉さんが相変わらず上機嫌にそう言った。
いつもなら「そうだねー、高いねー」って言いながら姉さんの絶対的な小ささを強調してやるのだが、今日は僕も機嫌がいいからやらない。
そのまま、姉さんとまた他愛も無い話を続けていると。
ぶーん、というバイブレーションの音が聞こえた。
ズボンの、ケータイを入れているポケットに触るが、震えている手触りは無い。
となると、僕じゃなくて姉さんか……そう思ったのとほぼ同時くらいに、姉さんがスカートのポケットから携帯を取り出していた。
姉さんは「ちょっとごめんね」と言いながら、ケータイを開いた。
電話に出る素振りは無いため、メールだと分かった。
「？　誰だろう」ボタンを押してから、姉さんはそんなことを呟く。

どうやら登録されてないアドレスからのメールらしい。
「えっと……」
姉さんはやや怪訝な顔で、ケータイを操作していた。
きっとメールを読んでいるのだろう。
ま、しばらくは黙っておこうか……なんて、僕が暢気に考えていると。
「え、えええええええ！？」
姉さんは、僕の隣で驚きの声を挙げたのであった。

――続く。

第０６話：６月上旬、火曜日（前書き）

マドカに届いたメールとは？
一通のメールから、カズマたちの日常は動き出す――！

第０６話：６月上旬、火曜日

放送劇のテーマが学園の七不思議に決まった翌日の放課後。
僕、こと門真一馬（かどまかずま）は学校の体育館裏に潜んでいた。
阿鳥学園の体育館裏は、『体育館裏』の一般的なイメージをそのまま再現したような状態になっている。
外からはまるで城壁のような高い壁に覆われているため中の様子が見えず、また体育館自体校内の端っこにあって学内の人間もあまり目をやる機会が無い場所であるため、人知れず何か……例えば決闘や告白をするには持って来いの場所なのだ。
そのため、アト学では定番の呼び出しスポットとして使われている。
同性から呼び出されたくない場所としてはぶっちぎりでワーストワンなのは言うまでもない。
……まあそれはいいとして。
潜んでいる、という表現で既に察している人もいるかもしれないが、今日ここに呼び出されたのは僕では無い。
僕は一度考え事をやめて、改めてその呼び出された本人の観察に集中した。
視線の先には、ランドセルを背負っていても違和感が無さそうな身長体型それに顔つきをした高校３年生、僕の姉さんである門真円（まどか）が、どこか落ち着かない様子でそこに立っている。
そう、呼び出されたのは僕の姉さんだった。
姉さんを呼び出した人間と、その目的は。
昨日の放課後、姉さんに届いたメールにすべて書いてあった。
「えええええ！？　か、カズマ！　これ見て、見て、見て！」

僕との雑談中に携帯に届いたメールを開くと、姉さんは近所迷惑極まりない驚きの声を上げた。
そしてその直後に、今度は興奮した様子で僕にメールを見せ付けてきた。
また厄介事かなあ……などと内心面倒に思いながら、僕はメールを読む。
「えーと、なになに……『門真円様へ。生徒会長の園口高司（そのぐち こうし）です。貴女にどうしてもお伝えしたいことがあり、突然ではありますがこうして直接、メールを送らせて頂きました。明日の放課後なのですが、体育館裏にお越しいただけないでしょうか。よろしくお願いします』……」
えっと……つまりどういうことだろう。
1回読んだだけではいまいち事態が飲み込めなかった僕は、何度かそのメールを読み返す。
早い話が、呼び出しメールのようだった。
時間は明日の放課後、場所は同性には呼ばれたくない場所ワーストワンな体育館裏。
そして呼び出し主は、今年度の生徒会長である園口高司。
名前から想像する限り、性別は男性で間違い無さそうだが……正直、それ以外は知らない。
ってか、普通生徒会長の顔とか人柄なんて覚えてないって。
「……なるほど、決闘の申し込みか」半分くらい思考を停止した上で、僕は投げやりに呟く。
「なわけないでしょ！」姉さんに全力で突っ込まれた。
「……だよねぇ。じゃあやっぱり」
同性には呼ばれたくない場所ワーストワンの体育館裏だが。
逆に異性から呼ばれると、目的はほぼ告白、というのが定説だったりする。
「へー、あの生徒会長が私に、ねえ……」
姉さんは年上の余裕を示すかのように、どこか尊大な言葉を放っ

た。
　しかしその顔はだらしなくニヤけている。
　まことに残念だが、年上の余裕も威厳も何も感じられなかった。
「って姉さん、生徒会長のこと、知っているの？」姉さんの知ってる風な口振りが気になって、僕は思わず食いつく。
「うん、直接話したことは無いんだけど、色々聞いてるよ。ってかカズマ、知らないの？」
「……んー、外見と中身以外なら知ってるかも」
「何を知ってるのよ！？」
　なんとなく『知らない』と言いたくなかったのでそう答えたら、姉さんに再び突っ込まれた。
「……名前だけ、かな」
「それ、絶対今メールを見て知ったことだよね……？」
　ジト目で姉さんに睨まれ、僕は仕方なく首を縦に振った。
　だから普通、１年生が生徒会長のことなんかおぼえてるわけないってば。
「じゃあ、私が知ってる限りで話すけど。今年の生徒会長……あ、うちの生徒会長って、基本的には３月に１、２年生の中から選ばれるんだけど」
「あー、なんか４月くらいに担任から聞いた気がする。２月中に立候補した人の中から投票だっけ」
「そうそう。で、今年生徒会長の園口くんは当時１年生だったんだけど、票数ダントツトップで生徒会長になってた。しかもテニス部にも所属しているらしくって、去年は１年生でありながらレギュラーとして大会に出場、しかも彼が出て負けた試合は無かったとか」
「……何の漫画？」
　１年生でレギュラー出場、しかも全試合負け無しって……。
　僕は思わず、姉さんもついに現実と妄想の区別がつかなくなったのかと疑ってしまった。
「実在してる人物だってば。しかも成績も優秀で、テストでは常に

学年１０位以内なんだって」
「文武両道で２年生の超人生徒会長か……ますます漫画だなあ。で、その非現実的な存在が、姉さんに何の用なんだろうね」
「体育館裏ってことは、やっぱり告白なんじゃない？」
嬉しそうな声で、姉さんはそう言った。
どうやら、まんざらでもないようだ。
「なるほど、完全無欠と言われた今年の生徒会長は、年上の女性が好みかぁ」
姉さんはどこか自慢げにそう呟く。
「……なるほど、完全無欠と言われた今年の生徒会長はロリコンだったのかぁ……」
なんだかムカついたので、全力で皮肉で返す。
と同時に両腕を前に構えてガードの体勢。
予想通り、直後に姉さんが無言で飛び回し蹴りを放ってきた。
「読めてるよ！」　言いつつ腕で姉さんのケリを弾く。
「ちっ！　大人しく食らえぇ！」
姉さんは着地するとすぐに、その反動を利用して後ろ回し蹴りで僕の中断を狙ってくる。
「させるか！」
流石にガードは間に合わないので、後ろに飛んでそれを避ける。
そしてステップから前進、殴りに行く。
もうお互いに攻撃パターンが分かっているため、最近の姉弟ゲンカは基本的に攻撃と回避の応酬になる。
それは日が沈んでから、二人がバテて飽きるまで続いた。

そして。
その後は若干険悪になったせいか生徒会長のことはそれ以上聞けないまま、今に至る、というわけだ。
なんだかんだで気にはなったので、僕は指定された場所である体

育館裏に潜んで、様子を見ることにしたのだった。
僕がここに来たのは帰りのホームルームが終わってすぐで、姉さんはその5分後くらいに、走ってきたのか少し息を切らせながらやってきた。
隠れている僕に気付いた様子は無かった。
姉さんは基本、思っていることが顔というか全身に出るので、僕を見つけているなら間違いなく何らかの反応を起こしている。
それが無いため、気付いていないと言えるのだった。
また、生徒会長はホームルームが長引いているのかまだ来ていない。
姉さんの表情は、僕に背を向けているため分からない。
しかし後姿でも、そわそわとした様子なのが分かる。
明らかに、生徒会長を待っていた。
なんだか、面白くなかった。
僕は姉さんに聞こえないよう、控えめにため息を吐く。
そもそもなんで、僕はこんなことをしているんだろう。
姉さんにカレシが出来ようが、僕には関係ないことだ。
というか今まで浮いた話なんて一度も無かったのだから、むしろ弟としては喜んでやるべきじゃないんだろうか。
そんなことを考えていると、がさ、と足音が聴こえてくる。
音が聞こえたほうに目をやると、そこには1人の男がいた。
近くの建造物から目算するに、身長は１７５ｃｍくらい。
……姉さんとは、３０ｃｍものさし１．５本分以上の身長差があることになる。
さらにその男が近づいてくる。
その姿がはっきり見えて、僕は今度はやや荒っぽくため息を吐いた。
生徒会長が、想像以上のルックスだったからだ。
髪は見るからにさらさらで、顔立ちも整形でもしたんじゃないかと疑いたくなるくらいに整っている。

そして体つきもどっちかといえば細く見えるのだが、ちゃんと筋肉が付いているのが分かるためなんだか頼もしく見える。
いかにも女子にモテそうなタイプだった。
成績優秀スポーツ万能でさらにイケメン……どこの漫画の登場人物だと、改めて思ってしまった。
その男は、姉さんの姿を見つけるとまるでテレビのＣＭに出ている芸能人のような爽やかな笑顔で手を振った。
少女漫画なら、きっと歯が光って背景には薔薇がちりばめられていただろう。
……もう、いい。
これ以上、そこにいるのが嫌になった僕は、黙ってその場から駆け出した。

「んー……すっきりしないなあ」
適当に走って、気付くと商店街にいた僕は、そのままゲーセンに入って憂さ晴らしでもしようと格ゲーの筐体にコインを入れた。
しかしいまいち集中できず乱入してきた誰かにあっさり負けてしまい、何度か再戦を申し込むも返り討ちにあって。
今は不貞腐れて、ゲーセン内のベンチでジュースを飲んでいるところだった。
なんだかんだで長い時間やっていたため、既に時刻は１９時を回っている。
でも、なんだか帰りたくなかった。
帰って、姉さんに今日の話を聞くのが嫌だった。
さて、今からどうしようか……そんなことを考えていると。
携帯が震えた。
この震え方は電話だ。
姉さんだったらやだなあ……なんて思いながら、携帯の画面を見る。

そこには、『桜ノ宮広子』と表示されていた。
ヒロコさんからだ。
珍しいなと思いつつ電話に出た。
「はい、カズマです」
「今どこにいる？」
僕が答えると、ヒロコさんはすぐにそう訊ねてくる。
「えっと……アト学の傍のゲーセン、で分かります？」
ヒロコさんたちの家、反対方向だった気がするけど。
「ああ、あそこか。こんな時間にゲーセンにいるなんて、カズマは不良だなあ」
と思ったら、すぐに把握したようで、茶化すように僕にそんなことを言ってきた。
「……切りますよ？」
「あー、待った待った、悪かったって！」
何だか嫌な予感がしてきたので強引に切ろうとすると、ヒロコさんが慌てた様子で僕を止めてくる。
「もう、突っ込み担当のくせに沸点低いんだから……突っ込むの担当、ってなんかエロくない？」
「ナチュラルにセクハラ発言してないで、さっさと本題を話してください」
女性の先輩から男性の後輩にセクハラって、めったに無いことだと思うんだけどなあ……。
「あー、ごめんごめん。えっと、今から学校に来れる？」
「は？」
あまりにもいつも通りのトーンで非常識なことを言うヒロコさんに、僕は思わず敬語を使うのも忘れて素で返してしまった。
「いや、今何時だと思ってるんですか」
とりあえず全力でヒロコさんに突っ込む。
ヒロコさんに突っ込む……いや、エロくなんか無いから。
「そうだね……ＰＭ７時半って言われるのと、１９時半って言われ

るのどっちが好み？」
「ＡＭとＰＭを略されると何時か分かりづらいので２４時間制で言われる方が好きですが……ってそういう話じゃなくって。こんな時間に学校って、もう最終下校時刻過ぎてるじゃないですか」
アト学の最終下校時刻は１９時である。
生徒会・部活共に例外は無く、生徒は必ずそれまでに下校しなければならない、と生徒手帳に明記されているのだ。
というか１８時半くらいになったら、先生達に追い出され始める。
以前放送部の会議が長引いていた時も、１８時半になったら見回りの先生がやってきて早く帰れ、とどやされたのは記憶に新しい。
今から入ろうとしても、まず間違いなく門前払いを食らうだろう。
「いったい、何をするつもりなんですか」
呆れながら、僕がそう訊ねると。
「もちろん」ヒロコさんは、とても楽しそうな声で。
「肝試しさ♪」
すでに辟易している僕に、そう言ったのだった。

――続く。

第０６話：６月上旬、火曜日（後書き）

お楽しみいただけたでしょうか。
次回は、ヒロコさんとの肝試しです。多分。

第０７話：６月上旬、火曜日（前書き）

前回の続き。
学校の七不思議ならぬ六不思議に挑もうとする、ヒロコとカズマの運命は？

第07話：6月上旬、火曜日

「こんばんわ、ヒロコさん」
学校から一番近いコンビニで立ち読みをしていたヒロコさんに、僕は声を掛けた。
「お、カズマ、来たか」
「ええ、来ましたよ」
僕は少し疲れた声でそう答える。
ヒロコさんに付き合うのは正直、色々と危険な気がしたのだが。
それ以上に今はなんだか帰りたくなかったし、あるいは姉さんのことを、ヒロコさんに相談してもいいかもしれない。
そんな考えもあったため、結局付き合うことにしたのだ。
「ふふん、さすがはアタシの可愛い後輩君だねえ。時間は……19時45分。よし、行こうか」
「行くって……本気なんですか？」
だから僕としては、ヒロコさんを止めてファミレスなりファーストフードなりで駄弁る方が好都合だったりする。
というわけで、僕は全力で止めに掛かった。
「もちろん」
だがヒロコさんは、いつも通りのやる気に満ちた笑顔で即答する。
どうやら本気なのは間違いないようだ。
「どうやって入り込むんですか？　校門は閉まってるし、絶対に警備してる人がいますよ？」
とりあえず、一番現実的な疑問をぶつけてみる。
「3年生を舐めないでほしいね。抜け道なんていくらでもあるさ」
怯んだ様子はまったく無い。
ヒロコさんはむしろ不敵な笑みすら浮かべて、そう返した。
「でも、万が一ばれたりしたら……内申に響きますよ？」

ならばヒロコさんが3年生、というのを逆手に取ってみる。
今年受験なのだから、問題を起こしたときのリスクは1年生の僕よりも高いはずだ。
「内申下がるのが怖くて、放送部にいられるかっての」
……確かに毎回、放送部で色々とギリギリ（アウト）な発言をしては姉さんに物理的にカットされてましたね。
激しく納得してしまった僕は、次の言葉を探した。
「んー……肝試しって……普通7月か8月にやるもんじゃないですか？」
だったら、根幹を揺るがしに行こう。
もうこれしかない！
「やりたい時にやるから楽しいんじゃない」
しかし、一瞬の躊躇も無いままにヒロコさんはそう返した。
……ヒロコさんって、そういう人だよね。
多分思い立ったから、で真冬でも肝試しの企画とか持ち出してくる気がする、この人。
「んー……」
「降参？」
次の言葉を考える僕に、ヒロコさんは誘うような瞳で訊ねてくる。
「……」
必死で考えるが、正直もう何も思いつかなかった。
というか、何言ってもこの人には無駄な気がする。
「……わかりました、降参です」
僕は項垂れながらそう言った。
「よっしゃ、じゃあ行こうか！　ついといで、カズマ！」
それから。
僕は嬉しそうなヒロコさんに手を引かれ、うんざりした気持ちで学校へと向かうのだった。

そして。
僕とヒロコさんは、無事校舎内に侵入していた。
何気なく携帯を開くと、時間は１９：５５と表示されている。
思ったより時間も掛かっていなかったようだ。
「……初めから、こうするつもりだったんですね？」
靴音が校舎内でやたらと響くのを気にしながら、僕は呆れた風にそう言った。
「まあね」
対するヒロコさんは、得意げに放送準備室の鍵を指でくるくると回している。
ヒロコさんが取った手段は、想像よりシンプルだった。
まず学校の敷地内には、鉤のついたロープで塀を越えるというまるで忍者のような手を使った。
鉤を引っ掛けた場所も、本人曰く特に監視の薄いところらしい。
なぜそんなことを知っているのか、と訊ねたら放課後に調べたとあっさり答えていた。
ついでになぜロープで壁を上るなんて芸当が出来るのかも訊ねたが、そっちは『乙女の秘密』ということで教えてくれなかった。
乙女の秘密、というには物騒すぎる気がするんですが。
さらに言えばヒロコさんがその技術を習得しているのはいろんな意味で危ない気がするのだが……もうそれは考えないことにした。
そんな感じで学校の敷地内に潜入した後は、再び鉤を使って校舎の壁を上り、鍵が掛かっていない部屋の窓から入り込んだ。
もちろんその『窓に鍵が掛かっていない部屋』とは……放送準備室、僕ら放送部の部室のことだ。
ヒロコさんは校舎の壁を上るとき、一直線に放送準備室の窓に向かっていた。
どうやら、僕が想像していた以上に計画的な行動であるようだ。
「で、どうするんですかこれから」
というわけで、今後の計画を問いただす。

「もちろん七不思議ならぬ六不思議を、ひとつずつ体験する。まずは無限階段から！」
「……やっぱり」
意気揚々、といった感じでヒロコさんは断言する。
対する僕はうんざりしているのを隠さずに、ため息を吐いた。
改めてヒロコさんの右手首を見ると、百均で売ってそうな安っぽいデジタル時計がついているのが分かる。
壊して抜け出すところまで体験する気満々のようだ。
「そういえば、あれって確か1階から3階に上がろうとして起こったんですよね。3階から降りる場合だとどうなるんでしょう」
無限階段の詳細を思い出しつつ、僕は素朴な疑問を口にした。
「ああ……それくらいは融通を利かせてくれるんじゃない？」
ヒロコさんがそれに、ちょっと不安げに返した。
……融通を利かせてくれる怪奇現象ってあるんだろうか。
「まあそんな難しそうな顔しないで。行こう？」
そんなことを考えていた僕の手を、ヒロコさんはそう言いながら引いていった。

そして。
「……」
「……」
僕とヒロコさんは、互いに何を言っていいかわからず、その場で黙り込んでいた。
ちなみに『その場』とは1階の廊下である。
そう、つまり。
僕とヒロコさんはあれから、普通に階段を降りて……何も起こらないまま、1階へとたどり着いたのだった。
いや、まあ常識的に考えれば当然のことなのだが。
「やっぱ何も起きないか」

苦笑いしつつ、ヒロコさんが沈黙を破った。
実際に何か起こるとは本人も思っていなかったのか、言葉通り『やっぱり』という顔をしている。
「他のも検証してみます？」
なんだかこのまま帰るのも寂しい……そう思った僕は、気付くとそんな提案をヒロコさんにしていた。
「アタシはかまわないけど……次、２２時よ？　それまでどうする？」
「え、２時間後なんですか！？」
さらっと答えたヒロコさんに、僕は思わず驚きの声を返した。
その後慌てて口を塞ぐ。
ヒロコさんも慌てて自分の唇に人差し指を当て、いわゆる静かに！　のポーズをしていた。
あまりにもヒロコさんが堂々としていたので忘れかけていたが、僕とヒロコさんはここに忍び込んでいるのだ。
なるべく慎重にいかないと……。
「うん、２時間後だね。２２時に、理科室の人体模型がブレイクダンスを始めるって話だから」
ひと通り落ち着いてから、気持ち控えめな声でヒロコさんが僕にそう解説してくれる。
「２時間か……長いなあ」
「見つかったら面倒だし、とりあえず部室に行こうか」
僕がぼやくと、ヒロコさんがそう提案してきた。
「そうですね。２時間も警備の目を掻い潜りつつ時間つぶしなんてやってられませんし」
その提案に乗らない理由も無いため、僕は素直に頷いて部室を目指した。
さっきは降りた階段を、今度は二人で上がる。
現在時刻を携帯で見ると、２０時０８分と表示されていた。
ＡＭ・ＰＭ制で言うと８時８分、無限階段が発生した時間である。

降りる時なんとも無かったのは、単に数分早かっただけだとしたら――？
脳裏にそんな考えが浮かんで、背筋に悪寒が走った。
ヒロコさんもそれに気付いたのか、僕と、自身の腕についている時計を交互に見つめている。
もしかしてまずいんじゃないか……そう思いながらも、僕とヒロコさんの足は止まらない。
そのまま、二人緊張感で声も出せないまま歩き続けて……3階にたどり着いた。
「って、やっぱり何も起こらんのかい！」
僕は忍び込んでいるという事実も忘れて、大声で突っ込んでいた。
「ばか、カズマ声大きい！」
ヒロコさんはそれを、慌てて咎める。
と、同時に。
「誰かいるのか？」
と、おじさんというにはやや若い……多分３０代前半くらいの男の声が聞こえた。
視線の先には、懐中電灯の光らしきものが映っている。
どうやら、警備で回っている人がたまたま近くに来ていたようだった。
「まずい……カズマ、こっち！」
ヒロコさんは言うが早いか、僕の手を引いて物陰へと隠れ、僕に抱きついた。
「ヒ、ヒロコさんッ！？」
さすがに声を上げたらまずいことくらいは分かっているため、小声で僕はヒロコさんに抗議の声を上げる。
「しっ、静かにして！　見つかっちまうから」
しかしヒロコさんはそんな僕にかまうことなく、限界まで身をかがめて息を殺していた。
警備員の足音が、段々近づいてくるのが分かる。

「誰かいるのか？」
警備員は警戒している様子で、さっきと同じ台詞を言った。
近くで、足音が響く。
もしかしたら、僕たちを探しているのかもしれない……と思いきや、足音は段々遠ざかっていった。
声のトーンも2度目はなんだかダルそうだったし、あまり仕事熱心な人では無かったのだろう。
隠れている僕らを、わざわざ探すことはしなかったようだ。
遠ざかる足音と一緒に、「気のせいか……」という呟きが聞こえたから、とりあえずは一安心である。
「……行ったみたいだな」
ヒロコさんも僕と同じ判断をしたのか、ようやく息を吐いてからそう言った。
「みたいですね……すいません」
僕は素直にヒロコさんに謝る。
さすがについ、ツッコミにチカラを入れすぎた。
「何、スリリングで楽しかったさ」
ヒロコさんは、それを爽やかに笑って許してくれた。
この気風のよさは、ヒロコさんの魅力の一つだと思う。
でも、僕が素直に謝ったのは……反省だけが理由では無い。
「なら良いんですが……そろそろ、放してもらえないでしょうか……」
僕は意を決してそう言った。
というのも、今僕は、相当きわどい状態にあるからだ。
警備員らしき人が去ってから、僕はここがどこかを認識した。
改めて考えてみれば、明らかに男性であった警備員がここを探さなかったのは当然だろう。
ヒロコさんが僕の手を引いて逃げ込んだのは……女子トイレの、しかも個室の中だった。
それに気付くと、トイレ独特の臭いと、すぐ傍にいるヒロコさん

の匂いが鼻を刺激する。
さらに隠れるためにヒロコさんに思いっきり引っ張られ、そのまま強く抱きしめられたこともあって、肌も完全に密着していた。
ヒロコさんの暖かさと柔らかさを、僕は今全身で感じてしまっている。
今見つかっていたら、間違いなく校内でアレな行為をしようとしていたカップルと勘違いされただろう。
「ん？　あー、ごめんごめん。じゃ、部室いこっか」
しかしヒロコさんはそれを気にする様子も無く、僕を普通に解放してからそう言った。
本当に、図太い人だ……。
僕は後ろで顔を真っ赤にしながら、ヒロコさんの後ろをついていった。

「さて、あと1時間30分か。何して暇を潰す？」
道中に警備員がいないことを確認してから、僕とヒロコさんは再び部室に入り込んでいた。
もちろん扉には鍵を掛けているし、電気もつけていない。
月の光だけが、今の僕らが頼れる唯一の明かりだった。
「……電気をつけるわけにもいかないですから、やれることも限られてますよね」
ヒロコさんの問いに、僕は考え込みながらそう呟く。
すると。
「……変なことしたら、イイ声で鳴くからね？」
ヒロコさんはいきなり四つんばいになって僕に近づき、耳もとでそんなことを囁いた。
吐息掛かっていて、それでいてどこか安らぎを感じさせる色っぽい声だった。
しかもそれを言った時、僕の耳にはヒロコさんの息が掛かる。思

わず背筋がぞくっとなった。
「しませんよっ！」
僕はヒロコさんから逃げるように下がりつつ、控えめな声量を維持しつつ全力でツッコんだ。
下手に乗ると、僕の貞操が危ない。
ヒロコさんはそんな僕を見て、あっさりいつもの笑顔に戻ると身体を起こしてその場で胡坐をかいた。
その瞬間、白い太ももの奥に黒いものが見えた気がした。
いや、何も見えていないことにしよう。
「カズマ、顔が真っ赤じゃん？　何か見えた？」
なんて思っていると、ヒロコさんが冷やかすようにそんなことを言ってきた。
「見えてないです、黒なんて！」
僕は慌てて否定する。
「……いや、ばっちり見えてるじゃん」
ヒロコさんはからからと笑いながらそうツッコんだ。
……否定できてなかった。
「ま、いいんだけどね。カズマもなんていうか……ヘタレというかチキンだよね。あるいは、好きな人でもいるの？」
ヒロコさんは楽しそうに、そんなことを言ってきた。
そう言われて、僕はようやくヒロコさんに聞きたかったことを思い出す。
もちろん、姉さんのことだ。
「んー……それなら、聞きたいことがあるんですが」
「お、なになに？」
僕が切り出そうとすると、ヒロコさんは嬉しそうに反応した。
顔に『待ってました！』と浮き出ているような気さえする。
その反応を見て、僕は少し考えた。
そういえば姉さん、ヒロコさんに生徒会長から呼び出されたことを話しているんだろうか。

なんとなくだが……話していないような気がする。
確か姉さんとヒロコさんは別のクラスだったはずだ。
さらに言えばヒロコさんは、今までの話から察するに一日中、夜こうやって潜入するための情報収集をしていたと考えて良さそうだから知らないかもしれない。
だったら、姉さんのことはまだ直接話さない方がいいんじゃないだろうか。
ふと、そんなことを思った。
「あ、えっと……」
そこまで考えてから、僕は思わず言葉を止める。
なら、質問は慎重にした方がいい。
変に姉さんを話題に出すと、ヒロコさんは鋭いから感付くに違いない。
「えっと、仮の話なんですけど。例えば……シズネにカレシが出来るとしたら、ヒロコさんはどう思います？」
ヒロコさん自身に置き換えて、訊ねてみることにした。
立場的にはヒロコさんよりもむしろシズネの方が相応しいのだが、感の鋭さまで考慮したら相談相手はヒロコさんで間違いないだろう。
「……ふーん、なるほどね」
少し考えてから、ヒロコさんはにやりと笑ってそう言った。
僕のことを、意味深に見つめながら。
「なるほど、カズマの気持ちはよく分かったよ。そだね、アタシは……シズネが幸せなら、それが一番だ」
「ヒロコさん……」
僕をからかうような言葉の直後、急に真面目な声で。
ヒロコさんは、そう言った。
声のトーンから、ヒロコさんがシズネをどれだけ大切に思っているかが感じ取れた。
正直、放送部の3きょうだいの中ではあまり仲が良くない姉妹だと思っていた。

でも、実際そんなことは全然無かったようだ。
むしろ、家族を想う気持ちは僕より強い……そう感じさせられた。
「やっぱりあの子は、アタシにとっては大切な家族だから。まあ姉としては、先越されるのはちょっと悔しいけどね。でもそれ以上に、アタシはあの子には幸せでいてほしいと想うんだよ」
ヒロコさんは意志のこもった瞳で、僕をまっすぐ見てそう断言した。
迷いなんてまったく無い。
それがヒロコさんの、揺るがない本心であることが伝わってきた。
……確かに、そうかもしれない。
僕もなんだかんだで、姉さんの笑顔を見るのは好きだ。
そして逆に姉さんが悲しそうな顔をしていると、僕までなんだか憂鬱になる。
きっと家族とはそういうものなのだろう。
そこまで考えた時。
僕はやっと、姉さんを祝福してあげようという気になれた。
相手の人だって聞いている限りじゃ成績優秀、スポーツ万能な生徒会長とケチをつけるところなんかありゃしない。
そんな人が姉さんに告白してきてくれたのだから、これ以上喜ばしいことも無いはずだ。
僕が内心で、そんな答えを出した時。
「よし……じゃあ、今日はもうこれで帰ろうか」
ヒロコさんが、僕にそう提案してきた。
「いいんですか？」
答えが出た今、正直この申し出は有り難かった。
でも、なんだか僕の勝手な都合で解散にしてしまったような気がして、僕はそう訊ねる。
「かまわないよ。アタシも帰ってやりたいことが出来たからね」
だがヒロコさんはそう言って、あっさり解散を決定した。
そうと決まったら、行動は速かった。

来た道を戻り、あっさりと校舎の外に出る。
そして、そのままヒロコさんに別れを告げ、僕は帰路についた。
帰って、姉さんに『おめでとう』と言うために。
今なら、姉さんがどんなうっとおしい自慢をしてきても笑って祝福できる気がする。
僕はそんな晴れやかな気持ちで、家へと走るのだった。

――続く。

第０７話：６月上旬、火曜日（後書き）

ありがとうございました。
続きはまた来週に！

第０８話：６月上旬、火曜日～水曜日（前書き）

前回の続き。
ヒロコに諭されたカズマと、告白されたはずのマドカは？
第０８話、お楽しみください。

＊２０１１年１２月３１日に推敲、加筆修正しました。

第０８話：６月上旬、火曜日～水曜日

夜の帳が降りきってもなお見慣れたと感じられる町を、僕は走っていた。
走りながら、僕は昔のことを思い出す。

それは、姉さんが中学1年生、僕が小学5年生だった頃の話。
ある日姉さんは、傷だらけの格好で泣きながら帰ってきた。
制服である半袖のシャツは刃物で切られたような傷がついていて、少し血が滲んでいる。
スカートも同じように埃と切り傷でいっぱいという……今見たら、暴漢か変質者に襲われたとしか思えないような酷い有様だった。
そんな姿を見て、僕は読んでいた本も投げ捨て、慌てた様子で訊ねる。
「おねえちゃん、どうしたの！？」
今思い返すと、『おねえちゃん』という響きが懐かしい。姉さん、と呼ぶようになったのはいつ頃だったっけ……まあそれはいいか。
それから、姉さんは泣きながらも何があったのかを語ってくれた。
終始しゃくりあげながらという聞き取りづらい事この上ない様子だったのだが、当時の僕は純粋無垢かつ素直だったので、根気良く姉に何があったのかを聞きだしていた。
そして、多分３０分後くらいに。
「……つまり、近所の空き地にいたネコとケンカして、そうなったってこと？」
僕は、最初の心配そうな雰囲気はどこへやらの完全にあきれ返った様子でそう確認した。
今思い返してみても、違っているのは制服だけで外見がまったく

成長していない姉さんが、乱れてくしゃくしゃになったツインテールを揺らして首を縦に振る。一緒に揺れたリボンが三毛猫柄なのは、もはや皮肉の領域だった。
そしてそこまで考えた当時の僕は、もうその時点で相手にするのが馬鹿らしくなって。
既にその辺りから、姉さんの話を適当に聞き流していた。
……あれ、当時の僕、純粋無垢でも根気良くも無いな……まあいいか。
そんな感じで僕はどんどん興味を失っていったのだが、姉さんは逆に僕に話し終えたことでまた戦意が湧いてきたらしく、「リベンジしてくる」と一度呟いて、着替えてからまた出掛けてしまったのだった。
そんな姉を『飽きずによくやるなあ』などと思いつつ見送った僕は、リビングに戻ってさっき投げてしまった本を拾い、どこまで読んだっけ……などと思いながら、本を開くのだった。
そして、その本をちょうど読み終わった頃、姉さんは帰ってきた。
良く見ると腕も脚も……というか体中が擦り傷切り傷だらけだった。
しかし、顔だけは晴れ晴れとしている。
「見なさい、カズマ！」
その顔が示すとおりの晴れ晴れとした声で、姉さんは誇らしげにそう言って、自分の後方に視線を送る。
姉さんの視線の先を眼で追うと、そこには一匹のトラネコがいた。
無駄な肉が一切無い、均整の取れたしなやかな体つき。
さらにはちょっとでも隙を見せたら狩られてしまいそうな、力強い野生の光を宿した瞳。
このネコ、相当なツワモノだ。
当時の僕は、子供心に一目でそう思った。
「この子はファング。名前の由来は、私を一度退けたその強力なツメ。今日から、この子はファングよ！」

トラネコ改めファングを見つめながら、姉さんは得意げにそう言った。
なおこの後、父さんにファング（ｆａｎｇ）は『爪』じゃなくて『牙』だ、と苦笑いで訂正されることになるのだが、それはまた別のお話。

これ以外にも、たくさんの姉さんとの思い出が頭を巡っていった。
それこそ、思い出しきれないくらいに。
なんだかんだで、僕と姉さんは一般的な姉弟としても仲のいい方だと思う。
だから、正直に言えば姉さんに恋人が出来てしまうのは寂しかった。
もちろん今までに、姉さんが遠くに行ってしまうように感じたことが無かったわけではない。
過去にそれを一番強く意識したのは……多分、姉さんが中学に上がった年だ。
４年間ずっと一緒に通い続けていた小学校に、いきなり１人で行かないといけなくなった、というのが当時の僕にはなんだか凄く寂しく感じられた。
いつも当たり前のように隣にいた人が、急に居なくなったのだから。
履き慣れていた靴が何の脈絡も無く壊れてしまったような、あるいは使い慣れていた文房具をなくしてしまったような……普通に生活するには困らないのだが、何か物足りなく感じる、そんな喪失感があった。
しかしそれでも、家に帰れば、あるいは家で待っていれば姉さんに会えた。
でも、姉さんに恋人が出来るとしたら、そういうわけにもいかないだろう。

恋人の家に泊まって、帰ってこない日なんてのもあるかもしれない。
だから、帰れば姉さんに会えるという安心感が……それすらもが崩れてしまいそうで、姉さんに恋人が出来ることを僕は素直に喜べなかった。
でも。
ヒロコさんは、それで家族が……自分が大切に思っている人が幸せになれるなら構わない。
そんな考え方を僕に教えてくれた。
それでいいんだと、気付かせてくれた。
確かに、そうだと思えた。
やっぱり姉さんは、僕の家族なのだから。
姉さんが幸せなら、僕にとっても喜ばしいことだ。
もし立場が逆だったなら、なんだかんだ言いつつも姉さんは僕を祝福してくれただろう。
だから、僕も姉さんを祝福してあげよう。
それが今、僕が姉さんにしてあげられる一番のことだと思った。
そこまで考えて、僕はさらに走るスピードを上げた。
ひたすらに。
ひたむきに。
僕と僕の家族が住んでいる家へ、全力で駆けていった。
僕の大切な家族に、祝福の言葉を伝えるために。

家の前に着く。
ポケットから鍵を取り出し、ガチャガチャと回していると、足音が玄関に近づいてくるのが分かった。
やや足音が軽い。姉さんだ。
鍵を開ける音で、僕の帰りに気付いたのだろう。
どうやら、自慢する気満々らしい。

いいさ、今日は存分にそれを聞いて、存分に祝ってやろう。
僕はそんな懐の大きいことを思いながら、ドアを開けた。
玄関には、想像通り姉さんが待っていた。
「ただいま！　姉さん、おめでとう！」
僕は帰宅と同時に、自分が出来る最大限の笑顔で姉さんにそう告げる。
「うわあああああん、カズマあああああ！」
一方姉さんは号泣しながら、僕に抱きついてきた。
ってあれぇぇぇぇ！？
「え？　なんで？　どういうこと？」
姉さんの行動があまりにも予想外すぎて、僕は思い切り狼狽していた。
「えぐ、えぐ、がいじょうが……うえええええええん」
姉さんが何か言おうとしている。
だがしゃくりあげながら話しているせいでまったく聞き取れない。
「え、待って姉さん！？　いきなりどうしたのさ！？　ってか何があったのさ！？」
冷静さを取り戻せないまま、僕は姉さんに訊ねていた。
「あらあら、カズマったら。今でもお姉ちゃんにべったりね」
しかし姉さんより先に、姉さんの声を聞いて様子を見に来た母さんが、何か微笑ましいものでも見るような雰囲気をかもし出しつつ、そう言ってから通り過ぎていった。
良く見てください母さん、僕は抱きつかれている方です。
そう母さんにツッコミを入れるよりも、姉さんの方が気になったため僕は母さんを放置して姉さんの話を聞くことにした。
さすがに玄関で続行すると母さんに何を言われるか分からないので、僕の部屋に移動してから。
そして。
姉さんをベッドに腰掛けさせて、根気良く話を聞くこと３０分。
僕はようやく、姉さんに何があったのかを理解できた。

「……つまり、要約すると。放課後生徒会長には会えたけど、生徒会長は姉さんの予想外な小ささに引いたらしくて、結局告白もうやむやにされてしまった、と」
「……そう言われるとシャクだけどあってる」
僕がそう確認すると、姉さんはしぶしぶ、と言った感じで頷く。
姉さんももう、普通に話せる程度には落ち着いているようだ。
「そっか……生徒会長、姉さんの言うとおり年上がタイプだったのかな」
「……どういう意味よ」
僕が納得したように呟くと、それを耳ざとく聴き取った姉さんに睨まれた。
「だから、やっぱり姉さんは子どもっぽいってことだよ。姉さんなんかと付き合ってたら、ロリコン扱いされてもおかしくないって」
しかし僕は怯まず、茶化すようにそう返した。
「なんですってぇーッ！　誰が子どもなのよッ！」
姉さんは、ネコが威嚇するような雰囲気で怒っている。
「だって、姉さんと出掛けたら、知らないおばちゃんにしょっちゅう、『あら、お兄ちゃんとお買い物？　いいわねえ』なんて言われてるじゃないか。姉さん、僕の姉に見えないんだよ」
「キーッ、食らえッ！」
遂にキレたらしく、姉さんはベッドから飛び降りると座ったままの僕に回し蹴りを放ってきた。
僕はそれを両腕でガードする。
僕に攻撃を止められた姉さんは少し下がって体勢を立て直すと、そのまま飛び膝蹴りで僕に襲い掛かってきた。
さすがにこれは受けきれない、そう思った僕は横に避けようとしたが……座っていたせいか、巧く避けることが出来なくて。
「くっ！」
結局姉さんの飛び膝蹴りを食らう羽目になってしまった。
急所は腕でガードしたため痛みは無いが、ベッドに押し倒され、

馬乗りされた状態になっている。
「さあて、ここからどうしてやろうかしら……」
僕を見下ろしながら、姉さんは不敵に笑う。
やや視線を落とすと、飛び膝蹴りの勢いで捲くれ上がったのか、水玉模様の下着が丸見えになっていた。
や、まあそれは別にどうでもいいんだが。今更姉のパンツなど見えても嬉しくないし。
ついでに言えば、胸にのしかかっている姉さんも実はそこまで重くない。
その気になれば振り落とせそうだが……やめた。
落ち込んでいる姉さんを見たくなかったからだ。
だから、僕とケンカすることでいつもの快活さを取り戻してほしかった。
それが、今の僕に出来る姉さんの慰め方だった。
……よく考えるとけっこうマゾいことやってる気がするけど。
そんなことを思いながら、姉さんからの追撃が無いことに気付く。
「……姉さん？」
気になって姉さんの顔を見る。
その顔は……どこか、穏やかなものだった。
「……ふぅ。やっぱ、いいか」
姉さんはそう呟くと、僕の上からあっさり降りる。
「姉さん？」
そんな姉さんが気になって、僕は思わず声を掛けた。
すると。
姉さんは笑って、
「ありがとう、カズマ。おかげですっきりしたよ。恋人が出来なかったのは残念だけど……ま、今の私にはカズマがいるし。今日はこのくらいで許してあげる」
そう言った。
とっても自然で、可愛らしい笑顔だった。

太陽のような、暖かくて眩しい笑顔。
「僕を恋人の代わりにするのはやめてくれないかな」
僕はそんな姉さんを何故か直視できなくて。
顔を背けて、ややぶっきらぼうに返してしまった。
「えへへ。いいじゃない、カズマだって恋人いないんだし。それに私たちは家族なんだから、仲良いのが普通でしょ？」
「まあ、そうだけどさ」
嘆息しながら、僕は答えた。
僕がしぶしぶながら肯定すると、姉さんはそれで満足したのか、「よろしい！　それじゃあお休み！」と上機嫌で部屋に戻っていった。
憑き物が落ちたような晴れ晴れとした顔つきで。
互いに恋人がいない姉弟だから、どっちかに恋人が出来るまではお互いがそれの代わり……か。
ちょっと恥ずかしい気もするけど、僕はそれ以上に暖かさを感じていた。
姉さんのことも、もう心配しなくて大丈夫だろう。
明日から……というかもう既に今から、いつもの姉さんに戻っていたのだから。
これでようやく、僕たちに平和な日常が戻った――そう確信した僕は、気が抜けてしまったのか、気付くと制服姿のままで眠ってしまっていた。

「うーん、まだ首が痛い……」
制服姿のまま姉さんに起こされた僕は、軽くシャワーを浴びてから朝食を取って姉さんとともに学校に向かった。
「もう、変な体勢で寝るからだよ。あれほど暖かくして寝なさいって言ったのに」
僕が愚痴ると、姉さんがそう返してくる。

「いや、今6月だし、暖かくしようとしたら暑くて寝られないから。ってかそれ以前に言われてないし、それ」
とりあえず突っ込めるところ全てに突っ込んでおいた。
なんだかこの、他愛の無い会話が懐かしい。
実際はせいぜい1日ぶりくらいであるため、懐かしがるほどのことでもないのだが。
それでも、僕は、当たり前ということの大切さを昨日思い知った気がする。
この日常を、今は満喫していても良いだろう……そんなことを考えながら、姉さんとの他愛ない会話を続けていると。
校門前に、長い黒髪に銀枠で楕円形の眼鏡を掛けた、見慣れた少女がいることに気付いた。
「シズネ。おはよう」
誰かを待っているような雰囲気のシズネに、僕は何気なく声を掛ける。
するとシズネは嬉しそうに、薄い夏服のせいか服の上からでもはっきり分かる胸を揺らして答えた。
「はい、おはようございます……えっと、旦那さま」
いつも能天気でマイペース、柔らかな微笑み顔が特徴のシズネとしては珍しく、やや恥ずかしそうで頬は朱に染まっている。
その仕草は正直、凄く可愛いのだが……それよりも今、もっと気にすべき発言があった気がする。
「えっと……シズネ、今なんて？」
というわけで、僕は迷わずに聞き返した。
「……えっと、ダーリンとかあなた、とか呼ぶ方が好みでした？」
すると不安そうな顔で、シズネもそう聞き返してくれた。
ここまでシズネが感情をあらわにするのも珍しい……のだが今はそれを気にしている場合じゃない。
「ち、ちょっとカズマ！？　いったいどういうこと！？　シズネちゃんがカズマを、だ、旦那さまって！？」

僕が一瞬考え込んでいた隙に、姉さんが根本的な問題に大慌てで突っ込んだ。

……どうやらまた、非日常がやってきてしまったらしい。

――続く。

第０８話：６月上旬、火曜日～水曜日（後書き）

楽しんでいただけたでしょうか。

マドカの件が解決したと思いきや、再び平穏とは程遠いカズマの日常。

次回はシズネとヒロコの姉妹が暴走します、多分。

第０９話：６月上旬、水曜日（前書き）

シズネは突然、カズマを「旦那さま」と呼んだ。
その真意とは？

門真一馬の愛すべき日常、第９話。
早くもクライマックスです。

第０９話：６月上旬、水曜日

「……じゃあ、今日の放送はここまで！　また来週、お会いしましょう！　ありがとうございました！」
姉さんがいつも通りの高いテンションで、お昼の放送を終わらせた。
しかし僕を含む放送部の面々は、それがどこかぎこちないということを既に感じ取れていた。
……まあ、しょうがないといえばしょうがないだろう。
正直今は、放送室内の空気がどこか張り詰めたものになっているのだから。
というのも。
いつもなら出番が終わったら後ろで待機しているはずのシズネが、何故か今日は僕の隣……姉さんの反対側にいるからだ。
幸せそうに、僕に身を寄せて。
とても嬉しそうな笑顔で。
一方、姉さんはとても微妙そうな顔をしている。
どうやら姉さんは、朝の一件からシズネとの接し方を図りかねているようだった。

「いったいどういうこと！？　シズネちゃんがカズマを、だ、旦那さまって！？」
姉さんは、慌てた様子でそう叫んだ。
無理も無いだろう、正直僕自身、何がどうなっているのか分からない。
とりあえず、改めて状況を整理しよう。

朝、姉さんと登校していると、シズネ……僕のクラスメイトで放送部の仲間である桜ノ宮静音（さくらのみやねね）がいることに気付いた。
雰囲気的には、そわそわと周りを見ていて……誰かを待っている、そんな感じだった。
目があったので「おはよう」と僕が挨拶すると、シズネは嬉しそうに挨拶を返してくれた。
そしてさらに……僕のことを旦那さま、と呼んだ。
念のために言っておくが、僕とシズネはそんな関係じゃない。
どんな関係？　なんて聞かれたら、クラスメイト、あるいは部活の友達、と答えるしかない関係だ。
だから旦那さま、なんて呼ばれる心当たりは無いんだけど……
「答えなさいカズマぁ！　昨日のアレはなんだったの！？　『おめでとう』って、お互い恋人が出来てめでたいね、とでも言いたかったの！？　こーたーえーなーさーいー！」
考えていたら、姉さんに胸倉を掴まれた。
そしてそのまま、力任せに前後に揺すられながらまくし立てられる。
ああ、落ち着いて考えられない……ってか姉さん、そんなに思いっきり振り回されたら、答えたくても答えられないってば。
姉さんも途中でそれに気付いたのか、一旦手を止めて、改めて僕を見た。
視線には「説明しろ」という意思がありありと篭っている。ついでに言えばちょっと涙目だ。
「えっと……」
しかしそれが解読できても、僕に説明できることは無い。
さっきも思っていたことだが、そもそも僕にだって思い当たる節がまったく無いのだから。
というわけで僕も、シズネに目で説明を求めることにした。
「？　なんですか、旦那さま？」
シズネはすぐ僕の目線に気付いたようで、嬉しそうに笑ってそう

応えてくれる。
いつもは自然に微笑んでいるシズネが、満面の笑顔を向けてくれるのは可愛いと思うし、正直ドキッともする。
だが、今はそれに見蕩れている場合じゃない。
聞くべきことを聞いておかないとこの後が絶対、色々大変になる。
「ねえ、シズネ……」
というわけで、詳しく話を聞こうとした……その時。
キーンコーンカーンコーン……と、聞きなれたチャイムの音が鳴った。
「おおう、やっぱいやっぱい。寝坊したァ！」
と同時に、後ろからは聴いたことのある声が聞こえてくる。
振り返ると、ヒロコさん……シズネの姉、桜ノ宮広子（ひろこ）さんがダッシュしてきている。
昨日の夜、夜の校舎で色々あったため、ちょっと顔を会わせるのが恥ずかしいような……
「お、マドカ。急ぐよ、もうギリギリだ」
なんて考えている僕には見向きもせず、ヒロコさんはそう言うやいなや姉さんの手を掴んで下駄箱の方へと一切スピードを落とさずにそのまま駆け抜けた。
「え！？　わ、ちょっと待ってヒロコン！　私にはまだ、シズネちゃんに聞かないといけないことがあああぁぁぁぁ……」
……ヒロコさんに引っ張られて、姉さんはそのままフェードアウトしてしまった。
「……私たちも急ぎましょうか、旦那さま？」
そんな姉さんとヒロコさんを見送りつつ、シズネが僕にそう提案してくる。
チャイムの余韻と、それに従って慌てた様子で駆け出していく回りの生徒達を見ながら。
考えるのが面倒になってしまった僕は、嘆息しながらシズネの提案に黙って頷いたのだった。

そして結局何もシズネから聞き出せないまま、昼休みになってしまった。
休み時間にシズネに訊ねようとしたのだが……他のクラスメートに声を掛けられたり、あるいは肝心のシズネが声を掛けようと思ったらいなかったりとで噛み合わず、結局何も聞けなかったのだ。
各休み時間終了間際に姉さんから「どういうこと？」というメールが来ていたことから推測するに、姉さんもどうやら何もつかめていないようである。
どこかギクシャクした雰囲気でお昼の放送が実行されて……ようやく、今さっき放送が終了した。
基本的に僕ら放送部は、放送終了後に放送準備室に移動して放送部のメンバー全員で昼食を取る。
そしてついでに、今日の放送の反省会議も行うのが通例となっている。
まあ反省会議といっても実際はヒロコさんの下ネタ発言にのみ姉さんから注意が飛んだり、お昼の放送のコーナーの一つである『うろおぼ演奏』担当の守口兄妹に他のメンバーから個人的なリクエストがあったりと和気藹々な雰囲気での昼食会になるのだが……今日は違っていた。
一番大きい違いは、座席だった。
いつもは室内に3つあるテーブルに、各きょうだいで分かれて座っている。
しかし今日は、何故か学年別になっていた。
2年生である守口兄妹、キョウさんとメイさん。ここだけはいつも通り。
おかしいのは、それ以外だ。
つまり姉さんと僕……では無く、3年生であるシズネの姉、ヒロコさん。

そして僕の隣にはシズネが座っていた。
しかも座ってる順番は、端から順に僕→シズネ→ヒロコさん→姉さん→メイさん→キョウさんという形である。
机はコの字型に置かれているため、僕の対面にキョウさんがいて……僕とヒロコさんでシズネをはさむ席順だ。
いつもと比べるなら、ちょうど姉さんとシズネが入れ替わった形になる。
「珍しい配置っすね？」
キョウさんもそれが気になったらしく、何かあったら一番元凶の可能性が高いと言われているヒロコさんに確認を取っていた。
「何よキョウ、そんなこと、どうだっていいじゃない……」
メイさんがそう呟いたのが聞こえたが、気にしないことにした。
「ええ、本日はわたし、旦那さまの分もお弁当を作ってきましたから♪」
キョウさんの疑問に、シズネが上機嫌に答える。
ってえええええええ！？
今シズネ、なんて言った？
「えええええええ！？　シズネちゃん、今なんて言ったの！？」
直接声に出すかどうかの違いはあるが、姉さんも僕とまったく同じ反応をしている。
いつもシズネはヒロコさんの分もお弁当を持ってきているので気付かなかったが、言われてからシズネのお弁当袋を見ると確かにいつもより大きい気がした。
どうやら本当らしい。
ちなみに僕と姉さんの今日のお昼は、母さんが寝坊したため朝に買ったいくつかの菓子パンだ。
「……『旦那さま』？」
その響きにキョウさんも疑問を持ったらしく、僕に目を向ける。
「ふーん、もうそういう関係なんだ」
一方メイさんはなんだか嬉しそうに、あっさりと受け入れてしま

った。
「あ、えっと旦那さま、何か嫌いなものってありました？」
そしてシズネは相変わらずマイペースに、話題を一歩先へと進めている。
「いや、特に無いけど……」
とりあえず僕は質問に答える。
って、既に旦那さまって呼ばれるの受け入れてないか、僕？
「カズマぁ！？」
姉さんも僕の無駄な順応性に気付いたらしく全力で僕の名を叫ぶ。
「ほらほらマドカ、二人の邪魔をしない」
いきり立った姉さんを、ヒロコさんが諭す。
その雰囲気はどこか慈愛に満ちていて、僕とシズネを暖かく見守ってくれているようだった。
……ん？
「だって、だってえ！　カズマがぁ～……」
姉さんが今にも泣きそうな声で駄々をこねる。
「まあまあ、気持ちは分かるけど。今は優しく見守ってやろうぜ？
アタシらは、あの子達の姉なんだから」
一方ヒロコさんはどこまでも優しい。
……まるで何もかもが分かっているかのように。
「ヒロコさん……」
「ん、何、カズマ？」
「……シズネ、何があったんですか？」
ヒロコさんなら、どうしてこうなったのかを知っているに違いない。
そう思った僕は、ヒロコさんに核心を訊ねていた。
「？　ああ、なんだ聞いてなかったか」
その一言で僕の言わんとすることを察してくれたのか、ヒロコさんは嬉しそうに語り始めた。
「いや、昨日カズマが『あんなこと』を言ってたからさ。シズネに

伝えたんだよ。その時の嬉しそうな顔ったら……今思い出してもアタシまで嬉しくなるね」
そう言ってヒロコさんは、本当に嬉しそうな笑みを浮かべた。
「あ、『あんなこと』……？」
一方で、戦慄するように姉さんがその言葉を拾う。
「ひ、ヒロコさん……シズネに、何を言ったんですか？」
多分その『あんなこと』、が鍵だと直感した僕はそれをヒロコさんに訊ねにいった。
「ん？　ああ、だから昨日……なんだっけな。シズネを彼女にしたい、みたいなこと言ってなかったっけ？」
「えええええええええええええええええ！？」
僕より先に、姉さんが反応していた。その顔には驚きの色しかない。
「ふーん、カズマ、やるじゃん。メイも負けてられないかな……」
一方、メイさんは感心したようにそう呟く。
そしてその視線は、メイさんの実の兄であるはずのキョウさんに向けられていた……いや、貴女が動くのは倫理的に危ないと思うんですが。
「って、僕そんなこと言いましたっけ！？」
というか他の人に突っ込んでいる場合じゃなかった。
正直、そんな記憶が僕には無い。
「か、カズマあんたそんなこと言ったの！？」
僕とほぼ同時に、姉さんが激しい口調で僕に訊ねた。
まったく覚えが無い僕は「い、いや記憶に無いんだけど……」と慌てて弁明する。
だが、姉さんは「なんでシズネちゃんなのよ！　おっぱいか！？　おっぱいがいいのかコンチクショウァァァァァァ！！」と聞く耳持たない様子で憤慨している。
「んー？　あれ、言ってなかったっけ？」
そんな僕たちを見ながら、ヒロコさんは不思議そうにそう呟く。

もしかしてヒロコさん、何か誤解しているんだろうか。
「僕、なんて言いました？」
「えっと……確か、シズネに恋人が出来たら……って話したよね？」
「……あー」
ヒロコさんの発言で、だいたい読めた気がした。
「なんか言いづらそうだったから、てっきりカズマがシズネの恋人に立候補したいのかと思ったんだけど」
さらに追い討ちをかけるようにヒロコさんが補足する。
その補足で、完全に理解できた。
「ん～……」
僕は一度、姉さんの方を見る。
姉さんは苛立った様子で、事情が分かったんなら説明なさい、という顔をしていた。
……仕方ない、話すか。
「えっと……それなんですけど。実は一昨日、姉さんが生徒会長に体育館裏に呼び出されまして……」
「え、あの生徒会長に！？」
僕がそう切り出すと、ヒロコさんが盛大に反応した。
あれ、僕が知らなかっただけでやっぱり有名だったんだろうか。
「へえ、アイツがな……」
キョウさんも感心したように呟いている。
「？　キョウ、知ってるの？」
と思ったらメイさんは知らなかったようで、キョウさんに訊ねていた。
「ああ、なんていうか成績優秀スポーツ万能、まるで理想の人間像をそのまま具現化したみたいな超人生徒会長だ……ってかメイ、知らなかったのか？」
キョウさんが、姉さんが僕に訊ねた時みたいに不思議そうにメイさんに訊ねた。
やっぱり学園では常識レベルのことだったんだろうか。

「メイと同じB組だった気がするんだが、生徒会長」
と思っていたら、とんでもない情報がキョウさんから出てきた。
それは確かに知らない方がおかしい。
「だって……キョウ以外の男になんて、興味ないから」
なんて考えるまでも無く、メイさんの爆弾発言。
ちょっと頬を赤らめて、上目遣い、良く見ると瞳も潤んでいる。
うわ、なんていうか超あからさまだ。
これはさすがにキョウさんでも気付くか……？
でも気付いてしまったら、この兄妹はどうなってしまうんだろう。
なんだかんだでキョウさん、メイさんのことを大事に思っているのは間違いないし。
そんな不安に駆られた僕たちは、激しく脱線していることも忘れて、キョウさんの次の発言に耳を集中させていた。
しかし。
「……お前は相変わらず、人見知りするんだなあ」
キョウさんはため息混じりにそう呟くだけだった。
……とても呆れた顔をしているメイさんが、凄く哀れに感じた。
「えっと……続きを話しますね？」
メイさんに対するせめてもの情けとして、僕は速やかに話題を変えた……というか戻した。
「えっと、まあそんな感じで姉さんが昨日……呼び出しに応じて」
結局告白はされなかったので、とりあえず『呼び出しに応じた』とだけ言っておく。
「で……なんか複雑な気持ちになっちゃって。それで……」
「ああ……だからアタシにそう聞いたわけか。なるほどね」
ヒロコさんはそこまでの説明で合点がいったらしく、確認するようにそう訊ねてきた。
「え……どういうこと？」
姉さんはまだ理解が追いついていないのか、アワアワした様子で僕らに訊ねてくる。

シズネもよく分かっていないらしく、きょとんとした表情だった。
「えっと、だから……カズマはただ、アンタのことを遠回しにアタシに相談しただけ……ってこと。ね？」
「あ、はい」
姉さんに説明してから、ヒロコさんは確認するように僕に振ってくる。
その説明には特に間違いも無さそうだったので、僕は素直に頷く。
「あー……なるほど。そっか、カズマも不安だったんだね」
それを聞いて理解できたらしい姉さんが、どこか安心したようにそう呟いた。
カズマ『も』、ということは姉さんも不安だったに違いない。
なんだかんだでウブな姉弟だったんだなあ、僕ら。
気付くと僕と姉さんは顔を合わせて、二人で微笑んでいた。
どうやら姉さんも、僕と同じことを思ったようだ。
やっぱり僕にはまだ、姉さんが必要なんだろう。
そして逆に……姉さんにも、僕が必要なんだと思えた。
「……あのー……」
そんな暖かい気持ちで胸をいっぱいにしていると、ヒロコさんが僕たちに声を掛けてきた。
「なんていうか二人で微笑みあってるところ悪いんだけど」
「？　なんですか？」
ちょっとすまなそうに言ったヒロコさんに僕が視線をやると……自然に、シズネの姿が目に入った。
まあ座席の都合上、ヒロコさんの方を向けば延長線上にはシズネがいるので、目に入るのは当然なのだが……気付くと僕は、シズネを見つめていた。
いや、見つめ返していた、の方が正しいだろう。
シズネも、僕の方を見ていたからだ。
その目はどこか不安そうでありながらも、強い意志をその瞳に宿しているような、そんな気がした。

僕はその目に惹かれて、声を掛けてくれたのがヒロコさんであったことも忘れて、シズネに見入ってしまっていたのだ。
「あの……カズマさん」
しかしそれはある意味、間違っていなかった。
シズネは僕がシズネを見つめ返していることに気付いたらしく、そんな決意に満ちた瞳で僕を見つめて、口を開いた。
呼び方は気付くと元に戻っている。
しかし。
僕を呼ぶときの声色には……むしろ数秒前の『旦那さま』と呼んでいた時よりも、熱がこもっているような気がして。
「カズマさん。だったら、改めて。わたしと、お付き合いしていただけませんか？」
その直後の発言で、それが「気がする」から「確信」に変わった。

――続く。

第１０話：６月上旬、水曜日～エピローグ。（前書き）

自身の勘違いを知ってなお、シズネはカズマにぶつかってくる。
門真一馬の愛すべき日常、最終話。カズマの決断は？

お楽しみください。

第１０話：６月上旬、水曜日～エピローグ。

放送終了後、反省会議のさなかで。
「カズマさん。だったら、改めて。わたしと、お付き合いしていただけませんか？」
シズネは僕にそう言った。
今まで見なれたぽややんとした雰囲気ではなく、まっすぐに僕を見据えた、真剣な眼差しだった。
思い返してみれば、それは予測できたことだった。
昨日……僕がヒロコさんを”誤解させることになった”相談をした直後に。
ヒロコさんは「やりたいことが出来た」と言って、すぐに帰ってしまった。
今なら分かる。
その『やりたいこと』とは、僕の話をすぐシズネに伝えることだったのだ。
そうしてシズネは、僕がシズネを好いている、と思うことになった。
でも。
よく考えてみたら、それだけではこんな事態には成り得ない。
シズネが僕を『旦那さま』と呼ぶような事態には。
つまり。
シズネが僕を『旦那さま』と呼んだのは、ヒロコさんから話を聞いて”両想いだった”と思ったからなのだ。
今日シズネが見せた異常なまでの行動力は、それが原因と見ていいだろう。
「……シズネ」

僕の呟きめいた呼びかけが聴こえたのか、シズネは僕に目で返事をする。
その瞳にはさっきまでの強い意思はなく……むしろ不安で、今にも泣き出しそうな目をしていた。
僕は思わず、言葉を止める。
言おうとしていた言葉を、続けられなくなっていた。
返事は……返事の内容は、もう決めていたつもりだったのに。
目の端に映った、姉さんの顔を見た瞬間から。
……そう、僕は断るつもりだったのだ。
姉さんは昨夜、『私にはカズマがいる』と嬉しそうに言っていた。
そしてさっきは『カズマも不安だったんだね』とも。
多分姉さんは、僕が姉さんのことを想っている以上に僕のことを必要としている。
だから、今はまだ姉さんの傍にいてあげたい。
そう思っていたけど……シズネの顔を見た瞬間に、シズネの本気さと必死さに気付いてしまった。
そして僕は、シズネを拒絶しようとする言葉を止めてしまっていた。
思い返してみれば。
今朝、いきなり僕を『旦那さま』なんて呼んだこと。
僕の分までお弁当を作ってきてくれたこと。
他にも、まだまだ思い当たる節はある。
今日の授業中は、やたらと僕に微笑みかけてくれていた。
さらに放送中はずっと、僕に幸せそうに寄りかかったりしていた。
僕の肩に掛かるシズネの微かな重みを、姉さんに悪いとは思いつつも正直、心地よく感じていた。
そんな今日のシズネの行動を見るだけでも、シズネの気持ちはかなり強いのだと思える。
「……」
かち、かち、と時計の針が進む音だけが部屋に響いていた。

それくらいに、部室は静かで。
僕は何も言えないまま……時が過ぎていった。
いっそこのまま、昼休みが終わるまでだんまりを決め込んでしまおうか、なんて情けない考えが脳裏をよぎる。
それは逃げだ、分かっている。
でも、実はそれが一番波風立たないいい方法なんじゃないか、なんて甘いことまで考えてしまっていた。
そんな、僕に。
「カズマ」
「……姉さん？」
姉さんが、どこか躊躇いがちに声を掛けてくれた。
「えっと……」
しかし僕が呼び返すと、姉さんは何かを言いかけて黙り込んでしまう。
見ると、口元はもにょもにょと動いている。
何か言おうとしている、しかし決心がつかず迷っている……
そんな風だった。
言葉を待って姉さんをじっと見ていると……姉さんは突然、目を閉じる。
そしてそのまま、すー、はーと軽く深呼吸をした。
それで落ち着いたらしく、再び目を開いた時には、どこか優しい光がその目に宿っていた。
姉さんはそんな目で、改めて僕を見据える。
そして。
「カズマ」
今度ははっきりした声で、僕の名を呼んだ。その声色は、慈愛に満ちた優しいものだった。
「カズマは……」
そのまま姉さんは言葉を続ける。
「カズマは、シズネちゃんが好き？」

とても、シンプルな言葉。
しかしシンプルであるが故に……僕もそれで良かったんだ、と納得してしまっていた。
同時に、まさか姉さんにこんな簡単なことを諭されるとは、とちょっと悔しくも思う。
姉さんの言うとおりだ。
難しく考える必要なんか無かったのだ。
シズネもそうだった。
彼女はただひたむきに……僕に真っ直ぐ、ぶつかってきてくれただけだ。
だから、あとは僕の問題。
それを受け入れるのかどうか……受け入れたいかどうか。
つまり。
僕が、シズネのことが好きか、どうか。
僕が考えることなんて、それだけで良かったのだ。
「……」
姉さんに倣って、僕は一度目を閉じる。
そして、自分に問いかける。
シズネが、好きかどうか。
そして、答えは出た。
「姉さん、僕は……」
腹を括った僕は、目を開けて姉さんを見る。そしてそのまま、その答えを姉さんに伝えようとした。
しかし姉さんはそれを手で制止して、そのまま目でシズネの方を指し示す。
目で「それを言う相手は、私じゃないでしょ？」と言っていた。
まったく、おせっかいな姉だ。
そう思いながらも、胸に熱いものがこみ上げてくる。
僕は、そんな暖かい気持ちで改めてシズネを見据えた。
彼女は僕に、真剣にぶつかってきてくれた。

だから僕も、それを真っ直ぐに返すことにした。
「シズネ。僕は……」

エピローグ

シズネに告白された日から一週間が経った。
「ほーらー、カズマ！　朝だよ！　起きて！」
朝、最初に聞くのが姉さんの声というのは今でも変わっていない。
今朝も白と黄緑のストライプな下着が見えるのを気にせずに、馬乗りになってがくがくと僕を前後（上下？）に揺すって起こしてくれる。
「おはよう……姉さん……」
「おはよう。もう、カズマったら相変わらず、朝に弱いんだから」
僕が眠そうに返事をすると、姉さんは文句を言いながら挨拶を返した。
しかしこれだけは弁明しておく、僕は別に朝に弱いわけではない。
姉さんが元気すぎるから、そう見えるだけだ。
まぁまだ寝起きで頭が回りきっていなかったり、寝起き早々頭をまるでミックスジュースでも作るかのような勢いでシェイクされたせいでちょっと吐きそうなのを密かに堪えていたりするため口には出さないが。
「じゃあ起こしたからね？　二度寝しないで、着替えたらすぐ降りてきなさい！」

念押しするようにそう言ってから、姉さんは僕を置いて降りていった。
僕はゆっくりと息を吐く。
正直まだ気持ち悪い……くそう、あの馬鹿姉め。
人の頭を何だと思っているんだ、万歩計かなんかと勘違いしてないか。
いや、そもそも万歩計も手で振って歩数増やすものじゃないんだけど。
母さんが一日一万歩は歩く、って張り切って万歩計を買った一週間後くらいに手で振って歩数をごまかしていたのを知ってしまったせいか、なんか万歩計に対して振るもの、というイメージが出来てしまっているようだった。
……寝ぼけた頭でそんな意味不明なことを考えつつ、僕は着替えを済ませて1階へと降りていく。
携帯の時計を見ると、今日はいつもより5分くらい早い。
姉さん、起こす時間を間違えたんだろうか……などと思いながら、僕は台所兼リビングに着くやいなやすぐに「母さん、今日の朝ごはんは？」と訊ねていた。
なんというかいつもの習慣であるため、別にどう返されても「そう」で終わるのだが。
まあ日常のコミュニケーション、と言うやつだ。
「えっと、今日の朝ごはんはシンプルに、お味噌汁と焼き魚ですよ」
……そう思っていたのだが、返ってきたのは非日常的な声だった。
聴こえてきたのは、母さんの声ではない。もちろん、姉さんの声でも。
「シズネ！？」
「ええ♪」
僕がその声の主の名を呼ぶと、本人はそれを嬉しそうに肯定した。
改めて台所を見ると、そこには本来学校で見慣れているはずの少女、クラスメートであり僕が所属している放送部の仲間であるシズ

ネ……桜ノ宮静音（さくらのみやね）が朝ごはんの支度をしていた。
ちなみに母さんは姉さんと一緒に、テーブルについてお行儀良く（？）朝ごはんが出来るのを待っている。
「え、なんでシズネがここに！？」
正直何が何だか分からず、僕は慌てた様子を隠せないままその場にいた人間全員に訊ねた。
「んー？　シズネちゃんが来たい、って言ったから」
その質問に、姉さんが悪びれる様子も無くさらっと答えてくれる。
「いや、えっと……えー」
あまりにも当然のように言われてしまったため、なんだか返す言葉が思いつかなかった。
いやまぁ、確かにある意味それで納得できてしまえるような存在ではあるんだけど、シズネって。
それでも何か突っ込むべきだと思って、僕は再び考えようとすると……
「……もしかして、ご迷惑でしたか？」
ちょっと不安そうな声で、シズネが僕にそう訊ねてきた。
「まさか。シズネがいてくれるのは嬉しいよ」
気付くと僕は、そんな言葉を返していた。
こんな言葉が自然に出る自分に、内心ちょっと驚きだ。
「えへへ、ありがとうございます……旦那さま♪」
僕の言葉に、シズネは嬉しそうに微笑んでそう言った。
正直言ってから少し恥ずかしかったけど、シズネのこの笑顔が見られたから良しとしよう……そんな気になれた。
……照れ臭いからさっきはスルーしたけど。
桜ノ宮静音。
クラスメートであり僕が所属している放送部の仲間で……そして、僕の恋人でもある。
と、やっぱり宣言しておくことにする。
そう、一週間前。

あの日から、僕たちは付き合いはじめた。
僕とシズネが付き合い始めてから数日は、姉さんもまだ割り切れないところがあったのかシズネに対してちょっとぎこちないこともあった。
しかしそれも、土曜日にいきなりヒロコさんが『よしシズネ、もう恋人になっちゃったんだし、今日は泊めてもらってきな！』なんて無茶振りをして。
さらにそれをうちの家族があっさりと快諾したために、何の脈絡も無くお泊りが成立して。
結果的に、姉さんとシズネがまた、二人でも自然に笑い合えるようになっていた。
母さん達があっさり承諾したのは、シズネが夜寝るのは姉さんの部屋、という条件をヒロコさんが付けてきたためでもある。
つまりどっちかと言えば……姉さんとシズネをちゃんと話させるためにやったことなのだろう。
もちろんそんな状況だったため、健全な男子諸君が期待するようなことは残念ながら何もなかったんだけど……でも、それはまた別の話だ。
ちなみに夜に二人が何を話したのかは、実はまったく聞いていない。
でも、僕はそれでいいんと思っている。
結局姉さんがそれで僕から離れるようなことは無かったのだし、逆にシズネと付き合っているからといって、僕も姉さんを蔑ろにするようなことは無いのだから。
そしてシズネも、彼女として僕の傍で微笑んでくれている。
付き合う前に比べたら、ちょっとスキンシップが多くなった気がするのは素なのかそれともヒロコさんの差し金なのかは判断に迷うところだったりするんだけど。
それでも、今、僕の周りの人はみんな笑っていた。
誰かがいがみ合うことだって無い。

それは、僕が望んでいたことだった。
……まぁ一晩で仲が良くなり過ぎたせいか、姉さんが今朝みたいにシズネと組んで僕に悪戯をすることが増えたのが最近の悩みの種ではあるのだけど。
でも、それもきっと僕にとってはむしろ日常なんだろう。
受験で忙しいはずなのに僕に対する悪戯ばかりにチカラを入れている姉さん。
同じく受験で忙しいはずなのにやたらと僕に抱きついては僕と実の妹であるシズネをからかって遊んでいるヒロコさん。
相変わらず僕に優しく、メイさんに対してはちょっと（かなり？）鈍いキョウさん。
こっちも相変わらずキョウさんにゾッコン、しかしそう言った発言はことごとくスルーされているメイさん。
そして、いつも僕の傍で優しく微笑んでくれているシズネ。
僕の周りの人は、こんなにも暖かく……そして、いとおしい。
だから、僕はそんなみんなとの日々をこれからも満喫しようと思う。
それが僕の……愛すべき日常なのだから。

ｌＦｉｎ．

第１０話：６月上旬、水曜日～エピローグ。（後書き）

これで本編は完結になります。
少しでも楽しんでいただけたのなら幸いです。
ここまで読んでくださった方、最後までお付き合いいただきありがとうございました！

……しかし、ここで終わってはあまりにも守口兄妹が出番少なすぎて不憫、ということで。
次回、オマケシナリオをやります。
それを以って、『門真一馬の愛すべき日常』を完結としたいと思います。

オマケシナリオ：7月下旬、木曜日。（前書き）

最終話の少し後、前期の文化祭が終わり、キョウの周りにちょっとした変化が起こる。

今回は主人公のカズマではなく、キョウの視点でお楽しみください。

オマケシナリオ：7月下旬、木曜日。

前期の文化祭を終え、夏休みが間近に迫った、ある日の放課後。
俺……放送部の2年生である守口響（もりぐちきょう）は、部室に向かって歩いていた。
A組の担任はやたらと帰りのホームルームをあっさり終わらせるため、教室を出て少しの間は独りだ。
まぁもっとも、あと3分もすれば妹の鳴（めい）が追いついてくるのだが。
何一つ変わらない、いつも通りの光景だった。
ただ、一つ。
俺の鞄に入っている……一通の手紙を除いては。

その手紙は、帰りのホームルームが始まる直前くらいに、クラスメートから渡された。
なんでも、隣のクラスの生徒から受け取ったものらしい。
隣のクラス……と聞くと思い浮かぶのはやっぱりメイのことだった。
産まれてからずっとそばにいる、俺の双子の妹。
俺同様に肉がつきにくい体質らしく体つきは細身で、見ようによってはやや貧相に感じる。
しかし顔立ちは充分に整っていると思う。
……思ってはいるのだが、その割には未だにメイから浮いた話を聞いたことがない。
兄としてはちょっと不安なんだが……もしかしたら、身内贔屓に見すぎているのだろうか。
……とまあそんなことを考えながら手紙を開くと、それは妹から

の手紙ではなく。
そこには2枚の紙が入っていた。
1枚はとある用紙で、もう一枚が手紙だった。
その手紙には……俺に軽音部に入って欲しい、ということが本人の几帳面さが分かる丁寧な字で書かれていた。
そう、もう一枚の用紙とはつまるところ、軽音部への入部届けである。
まあ実際、軽音部にあんまり興味も無かったので無視して放送部の部室へと向かっているのだが。
「あ、キョウー！　会いたかったよ、キョウー♪」
そんなことを考えている間に、メイが俺に抱きついてきた。
「ってこら、メイ。恥ずかしいから学校で抱きつくなって、いつも言ってるだろう」
俺がそう注意しながらたしなめると、メイはえへへ、と照れたように笑って俺から離れる。
「いいじゃない、兄妹なんだし。別におかしいことないでしょ？」
さらにさも当然のようにそう言い放っている。
「まぁ、いいけど……でも、あんまり俺とベタベタしすぎると、他の男が寄ってこなくなるぞ？」
「いいの。メイは、キョウのことが好きなんだから」
「いい加減、兄離れしてくれ……」
笑顔でそう言い切る妹に辟易しながら、俺はそう呟く。
「えへへ。それよりさー、聞いてよキョウー」
だがメイはそれを笑って聞き流し、いつもの他愛ない話を始めた。
なんだかんだ言っても、俺にとってメイは可愛い妹だ。
高校生にもなって若干ブラコンの気があるのは少々不安だったりするのだが、それをどこかで心地よいとも思っていたりする。
メイにもいずれ恋人を作って俺から離れてくる日が来るとは思う。
でも、その日までは……この心地よさを堪能しよう――メイが笑って話しかけてくれるたびに、俺はそんなことを思うのだ。

メイの話に相槌を打ちながらそんなことを考えているうちに、部室にたどり着く。
中からは話し声が聴こえてくる。どうやら既に、誰か来ているようだ。
「お疲れっす」「こんにちはー」
そんなわけで、普通に扉を開けて挨拶をする。メイもほとんど同じタイミングだった。
「あ、キョウくんにメイちゃん。こんにちはー」
俺たちにいち早く気付き、部長こと門真円（かどままどか）先輩が挨拶を返してくれる。
門真円（かどままどか）。
放送部の部長で3年生。
……なのだが、童顔な上にかなり未発達な体つきの少女で、初めて見たときは本気で飛び級してきた年下の子、と信じて疑わなかった。
まあ胸元についているネクタイの色は3年生のそれだから疑いようも無いのだが。
「お、守口兄妹。いらっしゃいー」
部長からワンテンポ遅れて、ヒロコさんも俺たちに挨拶を返してくれる。
桜ノ宮広子（さくらのみやひろこ）。
放送部の副部長で、こっちも3年生。
ヒロコさんも外見は部長同様に年齢不相応、と評していいだろう。
ただしその”不相応さ”は部長とは真逆である。
すらっと整った頭身にグラマラスという表現を使うのが相応しい、出るところは出ていて引っ込むところは引っ込んでいる、女性としては一つの理想と言ってよさそうな体つきをしていた。
部長が幼く見える別の要因として、よく隣に大人っぽすぎるヒロコさんがいることも挙げていいと思う。
「何話してたんですか？」

そんなことを考えながら席に着くと、メイが2人にそんなことを話しかけていた。
今日は別に何か会議がある日ではない。
ならなぜ来ているかというと……ぶっちゃけ暇つぶしである。俺もメイも。
なんだかんだ言っても、部室は居心地がいいのだ。
「んー、しいて言うなら放送劇の脚本について、かな。後編、予定通りにいくかちょっと改良するかを話してた」
メイの問いに、部長が考える仕草のまま答えてくれる。
「あぁ。前編は結構好評でしたよね」
俺が相槌を打つと、ヒロコさんが口を開く。
「うん。でもそれで後編こうなるんじゃ、って予想をしてくる子が多くてね。で、けっこうみんな正解を言い当ててたから……オチ変えたほうがいいんじゃないかって」
「なるほど……確かに、後編は今のところ、結構ベタな感じですしね」
「うんうん。だからさぁ、いっそのこと頑張って推理しようとした人が怒るくらいに理不尽なラストとかどうだろ？　って話し合ってたの！」
今度は部長が嬉しそうに答えた。
「……さすがにそれはやりすぎでは？」
この2人に『頑張って推理しようとした人が怒るくらい理不尽なラスト』を考えさせたら、どれだけ支離滅裂なものになるかわかったものじゃない。
まぁカズマが巧くコントロールしてくれれば何とかなりそうだが……ん？
「そういえば、カズマたちは？」
俺は姿が見えない残りの放送部員の所在を何気なく訊ねた。
「む」
そう訊ねた俺をメイが不機嫌そうな顔で見る……メイはなぜか、

カズマが嫌いなようである。
あいつは良いヤツだと思うんだけどな……俺にとっては可愛い後輩だし、いつもそのことを言って聞かせてるってのに。
「いや、確か先に図書館寄るって言ってたから……そろそろ来るんじゃないかな」
部長がそう言い終えたのとほぼ同時くらいに。
こんこん、とドアをノックする音が部室に響く。
「お、噂をすればなんとやら？」
その音に真っ先に反応したのは部長だ。
「待って。カズマたちならノックなんかしないって」
しかし、ヒロコさんがそれに突っ込みを入れつつ、来訪者に対応しようとドアまで歩いていく。
とほぼ同時に、扉が開いた。
「失礼します。私、２年生で軽音部副部長の九条（くじょう）と申します」
そこにいたのは、最近俺を軽音部に誘ってきている軽音部の副部長だった。
「おや、いらっしゃい。んー、軽音部の人が、ウチに何の用？」
ヒロコさんは心当たりが無いらしく、やや怪訝な顔でそう訊ねた。
「はい……えっと、部長さんはどなたですか？」
「えっと、私だけど？」
九条の問いかけに、部長が手を挙げて応える。
「……」
九条は一瞬、怪訝な顔で部長を見た。
しかしネクタイの色で３年生であることを確認したのか、すぐに真面目な顔に戻って口を開く。
「……それでは部長さん。本日はお願いがあって参りました」
「んー？　後期の文化祭の話？」
ついさっきまでその話をしていたせいか、部長がぱっと思いつくのはそれくらいだったようだ。
「いいえ」

案の定、九条は部長の推測を否定する。
俺もそれは違う、と思っていた。
軽音部の人間である九条がわざわざ頼みにくること。
それに、俺には一つだけ心当たりがあったからだ。
「そちらの部員である守口響を、我が軽音部に移籍させて欲しいのですが」
何の迷いも無く、九条は俺が予想していたことを言い切る。
断言、という表現が多分一番しっくりくる、堂々とした物言いだった。
「え……キョウくんを？」
部長にとってはいきなりのことだったらしく、何が何だかわからない……そんな反応をしている。
「守口響の演奏技術、前期の文化祭で拝聴させていただきました。それで軽音部一同は、ぜひ彼に我が部に来てほしいと思っているんです」
「え？　え？　ええ？」
……ってか部長、テンパり過ぎです。
「んー、それは困るかな」
そんな部長に代わって、ヒロコさんが九条の前に出た。
「キョウはウチの部にとっても必要、ってか必須な存在だから。移籍させて欲しい、って言われてもはいどうぞ、って渡すわけにゃいかないな」
そしてきっぱりと言い切ってくれる。なんだかんだで、ヒロコさんはここぞという時に頼りになるのだ。
「……」
気付くとメイも、無言で九条を睨んでいた。
そして部長もようやく話が飲み込めたのか、「駄目だよ！　キョウくんがいなかったら、うろおぼ演奏のコーナーがなくなっちゃう！」と2人を後押ししている。
3人から否定のまなざしを向けられ、九条は一瞬気圧された。

しかしすぐにまた気丈な態度に戻ると「それでいいと思ってるんですか？」と3人に問いかけてきた。
「守口響には間違いなく、ギターの才能があります。でも、ここにいたらそれを殺してしまうことになる。ここには楽器で守口響と切磋琢磨できる人がいませんから。でも……軽音部ならいくらでもそれがいるんです。彼のことを考えるなら……彼を移籍させてやってほしいんです」
そして、少し落ち着いた……だが有無を言わさないトーンで。
九条はそう言い切っていた。
「……」
反論が思いつかないのか、部長は黙り込んでしまっている。
確かに、九条の言うことも間違ってはいないからだろう。
メイもちょっと不安そうな感じで俺に視線を向けていた。そこには確かに、俺を気遣うような光が宿っている。
「……アンタの言うことも、まあもっともだな」
ため息交じりにヒロコさんがそう答える。
「じゃあ？」
それに気を良くしたのか、九条は嬉しそうに食いつく。
「んー……」
ヒロコさんはちょっと迷った感じで部長と顔を合わせる。
それに部長は、黙って頷いていた。
多分、この件をヒロコさんが受け持っていいかの確認をしたのだろう。
俺の推測を肯定するように、ヒロコさんが言葉を続ける。
「アンタの言い分は分かった。放送部としては、キョウが軽音部に行くことに関しては依存は無い」
「ええぇー！？」
ヒロコさんの発言に、メイが非難の声を挙げた。
俺もヒロコさんを見た。
正直、止めてくれるものだと思っていたからだ。

「感謝します。話の分かる方々で助かりました」
達成感に満ちた微笑を浮かべつつ、九条はそう言った。
しかし。
「放送部としては、ね」
まだ、ヒロコさんの話は終わっていなかったようだ。
一度そこで言葉を止めてから、ヒロコさんは俺を見ていた。
「キョウ」
「はい」
名前を呼ばれて、俺は返事をする。
「アンタはどうしたい？　アンタがもし軽音部にいってギターの腕を磨きたいって言うんなら、アタシたちは止めない」
俺の勧誘をしようとしていた九条と同じくらい、真面目な声で。
ヒロコさんは俺にそう言った。
「確かにアンタがいなかったら、コーナーが一つ無くなっちゃうんだけどね。でもそれは部長であるマドカと、副部長のアタシでなんとかするべきことだから。放送部にいるか、軽音部に行くかは。アンタの好きにしていいよ、キョウ」
そこまで言ってから、ヒロコさんは満足げに目を閉じる。
言いたいことは言い切った、そんな感じだった。
「ヒロコさん……」
ヒロコさんの目は、慈愛に満ちているように感じた。
いつもはセクハラが服着て歩いてるような人だが、やっぱり決めるところはきっちり決めてくれる。
つくづく、この先輩には敵わない。
「えっと、九条」
だから俺も、それに答えることにした。
「悪いけど……俺は軽音部には入らない」
はっきりと。
俺は九条に向かってそう告げる。
「どうして！？」

信じられない、そんな顔で、九条は俺を見る。
「うちの軽音部の規模は知っているでしょう？　部長は、それを差し置いて貴方を即戦力として採用したいって言ってるの。ここで頷けば、貴方は一気に１００人以上の上に立てるのよ！？」
……軽音部、そんなに人いたんだ。某アニメの影響もあるんだろうか。
「ああ、それでも俺は放送部を選ぶよ」
「軽音部に入れば、絶対に貴方は上達できるのよ？　こっちには、切磋琢磨すべき仲間がいっぱいいるんだから！」
ややヒステリックに九条は叫ぶ。
でも俺はそれに気圧されることなく、言ってやる。
「放送部にだって、かけがえの無い仲間がいるんだ。そいつらに囲まれて、くすぶるわけも無いさ」
「……でも、技術はこっちの方が上よ？」
念を押すように、九条はそう訊ねてくる。
「技術だって、なんとかなるさ。ウチには優秀なブレインがいるからな」
それすらも否定するために、俺はきっぱりと言ってやった。
ちなみにブレインとは、他ならぬカズマのことだ。
鞄に常時本を入れているだけあってか、アイツはそういう資料を探すのは得意だ。
何か分からないことがあれば、とりあえずカズマに聞いておけば１時間くらいで調べ上げてくれる。
「……わかったわ、今日のところはこれで帰りましょう。でも、覚えてなさい。私は諦めないから」
遂に観念したのか、九条はそんな捨て台詞を吐いて部室を去っていった。
それを見送ってみんなが席に着いた直後に、ようやく部長の弟で部のブレインの地位を獲得してきている門真（かずま）一馬、ヒロコさんの妹で最近カズマの恋人となった桜ノ宮（さくらのみや）静音が部室に到着する。

「おつかれさまです」「お姉ちゃん、来たよー」
２人がほとんど同時に、違う言葉で挨拶していた。
なんだか俺とメイみたいでちょっと微笑ましくなる。
そしてカズマは席に着くやいなや、口を開いた。
「さっき、見かけない人が部室から出てきましたけど。何かあったんですか？」
俺は少し、考えてから。
「そうだな……いや、何もないよ。いつも通り、さ」
そう答えて、はぐらかすことにした。
何の事件も起こらず、平穏無事で楽しい日々――それがきっと。
俺たちの望んだ、日常なのだから。

Ｆｉｎ．

オマケシナリオ：7月下旬、木曜日。（後書き）

そんな感じでハッピーエンド。
門真一馬の愛すべき日常、これでひとまずは完結です。
ここまでお付き合いいただきありがとうございました！
来週からはまったく別の、新シリーズを書いていくつもりです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2226y/

門真一馬の愛すべき日常

2012年1月14日12時45分発行